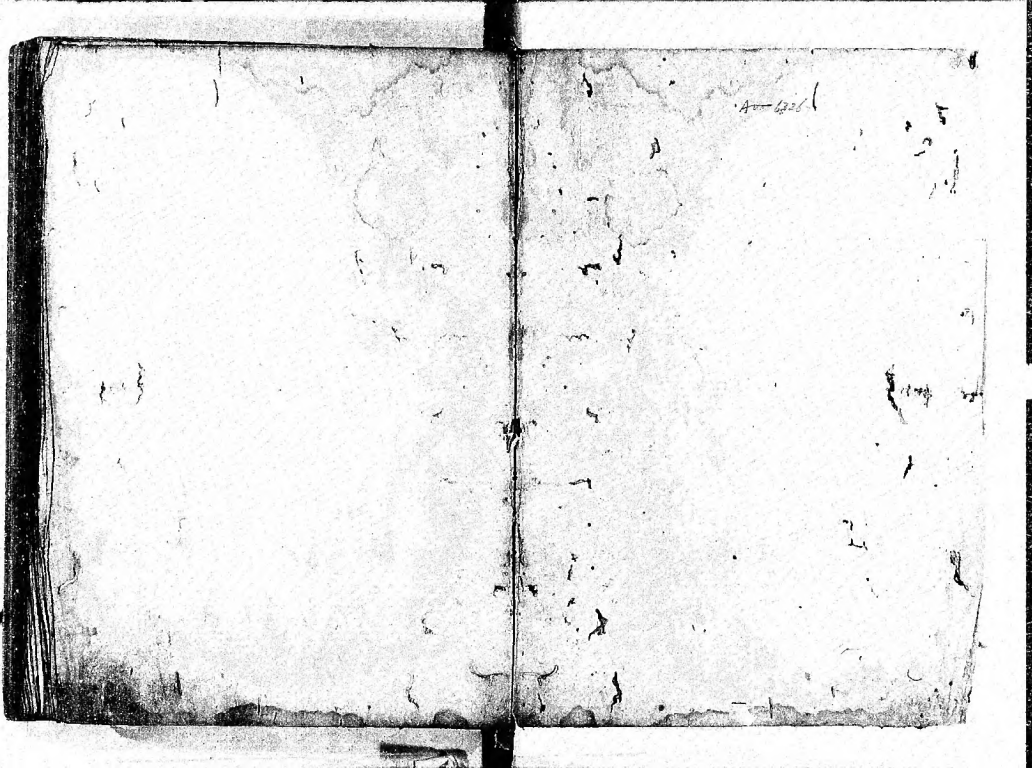


A 00
6326







新古今和歌集序

使和歌者群德之祖百福之宗也玄象天成五降六情之義未著素鸞地靜三十一字之詠甫興余來源流寔繁長短雖異或舒下情而達聞或宣上德而致化或屬遊宴而書懷或抹艷色而寄言誠是淫世撫民之鴻出故賞心樂事之龜鑑也者也是以聖代明時集而錄之各窮精微何以漏網然猶歲歲之玉珠之有餘鄧林之伐伐之無盡物既如此歟亦宜然仍詔冬歲右衛門督源朝臣通具大藏卿藤原朝臣有家左近衛權中將藤原朝臣定家前上總介藤原朝臣家隆左近衛權少將藤原朝臣雅經等示擇貴賤高下令擬錦白玉章神明之詞佛院之作爲表

希夷難而同錄始於曩昔迄于當時假此總編各得呈進每至玄園花芳之朝環砌風涼之夕難敵津之遺流尋淺香山之芳躅或吟或詠校屏象之牙角無黨無偏殊翫翠之羽毛裁成而得二十首類聚而爲二十卷若曰新古今和歌集矣時令節物之篇屬四序而星羅衆作難詠之什並群品而雲布絳緝之致蓋玄脩矣伏惟來自代邪而踐天子之位謝於漢宮而進汾陽之躋今上階下之嚴親也雖無際帝道之詔詢日域朝廷之本主也爭不賞我國之習俗方今葵宰合辟花茂詠仁風化之樂萬春之日野之草悉麗月宴之舉千秋之津洲之塵惟靜誠難無意有載之時可願深焉採絳之志改撰斯一集永欽傳百王彼上古之萬葉集

者蓋是和歌之源也編次之起固准之儀星序惟選煙
燭難枚延喜有古今集四人合編命而成之天曆有後
撰集五人奉言而成之身後有拾遺後拾遺金葉詞
苑十載等集雖出於聖王數代之勅殊恨為撰者一
身之寂固茲訪延喜天曆二朝之遺義定法何步塵五
輩之英豪排神仙之居屢刊備之席而已斯集之為
粹也先抽萬葉集之中更拾七代集之外深索而徵長
無遺廣求而片善必舉但雖張網於山野微禽自逃
雖連筌於江湖小鮮偷漏誠當視聽之不逮定有篇章
之獨遺今只隨採得耳所勅終也採於古今者不載當代之
御制來自後撰而初加其時之天章各考一部不滿十篇
而今所入之自詠已餘三十首六義若相急三五雖可足

依無凡骨之絕妙還存露詞之多加偏以耽道之思不
能多情之眼名厥取捨者未尚餘時運冲襟於我
甚矣德而四十萬年異域自難觀聖造之書史聖
神武開帝功而八十二代當朝未聽穀集之標集矣
定為天下之都人士女詭奇斯道之過達矣不獨記仙
國無何之歸有嘲風弄月之興亦欲呈皇家元久之
歲有溫故知新之心修搖之歡不在茲乎聖曆乙丑壬春
二月云余

そのうへは、
びびく、
ら、
の葉、
そ、
との、
と、
と、
さ、
し、
を、
し、



新古今雜歌集卷第一

春哥上

くはふといふと、人侍を

攝政大臣

今「野山」にして白雪のよりけり 花春の来り

美風あつた
太上天皇

かゝる春をいふはまことに至るべき時なり

百首哥をとりどりしりし時春の哥

貳子肉親王

いふに春はさくら花のうつくしく、秋はきぬのうつくしく

平南哥々々

宮内卿

あつた。お宝のふくらみ、さうして、

道前開白太政大臣在太皇太后前

い悔を待たず、主君の心と

皇太子文惠後戚

不修之徒也

顯子
後惠法師

美しき花のうらふまはなを波にみちみちる

西泠印社

常々より、おと童六といふあて、昔より、あつた。

讀書不知

何れも、書いやりつゝ、とふ病だといふは、まゝなすまじり

四律養液々々

堀河院中百首方よりつりまらぬとの
おろし成りしやう権中納言國信

春日野のふりえり車つてははるのふりえり
題不知

あつてはるのふりえり車つてははるのふりえり
天曆寺時屏風寄主忠見

春日野のふりえり車つてははるのふりえり
崇徳院と百首寄主くはるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり
若菜はし袖もふりえり車つてははるのふりえり

太上天皇

藤原家隆朝臣

皇太后宮太政大臣

前泰成教長

雪のつばきとばき

友原仲實朝臣

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

中納言家持

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

讀人不知

今更雪のつばきとて雪の松のうきをわき

元河内能恒

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

家百首并今冬寒風

橘政太政大臣

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

和歌や春山月也

越前

山ありがけきこひ春の月をみたり

詩とけりまてきこひをわき

左衛門督通光

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

藤原家能

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

春の雪

源重之

雪のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

源重之

梅のつばきとばきとて雪の松のうきをわき

山邊赤

梓弓くゆ山く家判てそふてはる言のふ

いん人志く次

梅枝がけそうけいふ言のふ神流あふあふ

百首并いてはけり一時

惟明親王

うこの波のけりうりそふとひてまふてん

新一巻と

志貴皇子

若きくそふのうのこふひのこふまふなりとふ

百首歌も一時

最大僧心慈因

あふふの煙のふふのふふふふふふふふ

崇徳院百首并いてはけり一時

藤原清輔朝臣

あふふのふふふふふふふふふふふふ

晩雨にふふふふふ

後深寺方大臣

かたの海のふふふふふふふふふふふふ

ふのふふ詩とふふてふふふふふふふ

まふふふふふ

太上天皇

えいふふふふふふふふふふふふふふ

攝政太政大臣家百首并いてはけり一時

藤原家隆朝臣

あふふふふのふふふのふふふふふふ

守貫は親とあふ首歌ふふふふふ

春の夜の夢の梅の影をさへみればゆきの中に
まはるけき梅の花をさへみればゆきの中に
ゆきまに

中務

さうさう春の夜の夢の梅の影をさへみればゆきの中に
守骨は注親日家力十首奇

友原定家朝臣

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
題一巻と

宇治前開白太政大臣

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
おきき梅の影をさへみればゆきの中に

ゆきまに

友原敦家朝臣

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
おきき梅の影をさへみればゆきの中に

梅の花遠き
源俊賴朝臣

源俊賴朝臣

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
百首奇多てとつ

時

藤原定家朝臣

梅の花うしろの神のうしろの月の新の影をさへみれば
藤原定家朝臣

藤原定家朝臣

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
千の百首奇多

右衛門尉通具

おきき梅の影をさへみればゆきの中に
おきき梅の影をさへみればゆきの中に

白河宮太史俊成女

梅の花うしろの神のうしろの月の新の影をさへみれば
おきき梅の影をさへみればゆきの中に

おきき梅の影をさへみればゆきの中に

じわり花よりぞ大貳三位よほり

権貴納言定頼

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

や

大貳三位

まゝにけしひの花よりとほのかりけり

二月雪あやといふ事といふ侍より

康資王母

梅よりけしひの花よりとほのかりけり

題より

おの注師

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

百首并に

武子肉親王

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

上河内因太良家より梅も尚神といふ事といふ侍より

藤原有家朝臣

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

題より

八條院高倉

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

文集嘉祿春夜詩不明不暗勝月といふ事

といふ侍より

大貳千里

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

祐子肉親王よりつくりし侍より

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

ふかきまをみける梅の花よりとほのかりけり

いし人としのをまゐるをいし人の初らる花
花の哥とてしめしむ

西行法師

野山をゆくところのうらやまをいふ花の歌

和歌取やとて花のうらやまをいふ

車道法師

かたきやだぬの根のうらやまをいふ

頼朝

伴曾の歌ありきとていふ

源公忠朝臣

まづの年ふむとていふ

金とていふ

道命法師

白雲のうらやまをいふ

百首歌あり時 藤原定家朝臣

あまのうらやまをいふ

友成家衡朝臣

野山をゆくところのうらやまをいふ

和歌取やとていふ

藤原雅經

名花ありきとていふ

中首歌ありきとていふ

まづの年ふむとていふ

左卿花のうらやまをいふ

取大僧云慈同

地りり人々をくくはるる里の宮に於て主君をく

千六百の歌合と 右衛門督通具

張入とある野の標へくくをくくをくくをく

三任家能

花をくくくくくくくくくくくくくくくくく

藤原有家朝臣

わくくくくくくくくくくくくくくくくく

新古今和歌集卷第二

春奇下

釋阿和奇取也て九十有八侍立かり屏

風一山にらるるにらるるにらるる

太上天皇

櫻にらるるにらるるにらるるにらるるにらるる

千五百番歌合春奇

皇太后又太皇太后

てそるるにらるるにらるるにらるるにらるる

百番奇

式子内親王

てそるるにらるるにらるるにらるるにらるる

因太皇太后も河内山花にらるるにらるる

白雲のたのめやうにらるるにらるるにらるる

京極北園皇太后

祐子内親王家より人花奇にらるるにらるる

権大納言長家

花多にらるるにらるるにらるるにらるる

類不知

山崎赤人

てそるるにらるるにらるるにらるるにらるる

在原業平朝臣

花多にらるるにらるるにらるるにらるる

北河内躬恒

作とてそるるにらるるにらるるにらるる

作珍

山にさうくしる青い山といひつゝ花と云ふは

此詩を

我屋と物ありて花のちりええと云ふなり

寛平の時さうの文の并合のうま

讀人あり

寛平の時さうの文の并合のうま

類を

六人

さうの文の并合のうま

讀人あり

さうの文の并合のうま

類を

寛平の時さうの文の并合のうま

さうの文の并合のうま

類を

寛平の時さうの文の并合のうま

類を

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

寛平の時さうの文の并合のうま

越前

山雲の庭よりかれ道なき花のりやとくもくも
不肖歌とてはけり一平湖上花と

文内卿

花のふいの山風吹くやうき約よりわきも
開路花と

逢坂や木と葉の花の吹くやうきと園の松の
百首歌とてはけり一時去り

二條院讃

山雲と葉の風吹くやうき花のりやとくもくも
百首歌とてはけり一時去り

三條院讃

やだも名松の松のりやとくもくも
春日松奇合とてく一時去り

刑部卿頼輔

らりゆふ花のりやとくもくも
寂勝回天と院障とてく一時去り

太上天皇

みよ野のりや松の松のりやとくもくも
千六百首とて合と藤原定家朝臣

橋氏の庭の松のりやとくもくも
わき勢志のりやとくもくも

一平湖上花とてはけり

いづくのついでに

太上天皇

さふふと庭よりうらうら花をみれば

いづ

橘政太政大臣

一 けふは人のまゝのふりて

家のやうなふりて

いづ

武子内親王

やうなふりて

惟明親王

いづ

五十首詩

藤原家隆朝臣

いづ

いづ

皇太后宮女

いづ

後徳太子大臣

いづ

入道前関白太政大臣

後惠法師

いづ

殿前門院大輔

いづ

千六百首

いづ

あはれ小事と 藤原雅經

美らふも我と云ふは 萬葉集 卷之九 美らふと云ふ

題不記

後白河院御寄

わがしらりてわがしら 楊女今来しと云ふは

殘春のついで 攝政太政大臣

吉野山美らゆき雲沈みそむく 木村と云ふは

そむく 大納言經信

ありきのわがしらりてわがしら ありきわがしら

百首歌の中 式内親光

花しらりての美らきわがしら 花しらりての美らきわがしら

小野文の松樹侍 小野文の松樹侍

きりぎりす 清原元輔

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

曲水宴と云ふ 中納言家持

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

枕貫之曲水宴 枕貫之曲水宴

小事と云ふゆき 板上市是則

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

皇極院のわがしら 皇極院のわがしら

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

千八百の奇合 宗道蓮法師

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

あはれわがしらりてわがしら あはれわがしらりてわがしら

權中納言公經

春ぬくくはたの山にふかのくきふをふをふ
百首歌をてしりり一時

権中納言公經

藤原家隆朝臣

さき野の原の山にふかのくきふをふをふ

白太右衛門左衛門

駒よきふはたの山にふかのくきふをふをふ

城河院中時百首歌をてしりり一時

權中納言國信

名はたきふはたの山にふかのくきふをふをふ

藤原家隆朝臣

藤原興風

ひはたきふはたの山にふかのくきふをふをふ

延壽十三年壬子院方公經

藤原興風

ひはたきふはたの山にふかのくきふをふをふ

延壽十三年壬子院方公經

藤原興風

ひはたきふはたの山にふかのくきふをふをふ

延壽十三年壬子院方公經

藤原興風

ひはたきふはたの山にふかのくきふをふをふ

延壽十三年壬子院方公經

藤原興風

書ゆゑに物々花のたのしみなきをひき

放りねしうけとるなり

緑の香しうけに藤の花とあつたを花のたのしみ

春の書ゆゑに實の方朝臣のよきとほりなり

藤原道信朝臣

しりのうけをわけるしむきとふたれと書ゆゑ

修りしは春なりし春のふたれときき

大僧正朝臣

木のたのしみと今あつたをききしは花のたのしみ

みき首なりしなりし時

東蓮法師

書ゆゑに物々花のたのしみなきをひき

おろし三月書ゆゑに花のたのしみ

藤原伊細

おろしと花のたのしみなきをひき

後しし

白太治太史俊成女

磯上ありしと花のたのしみなきをひき

寛平御時書ゆゑに花のたのしみ

僧人なりし

おろしと花のたのしみなきをひき

山家書春といふなりし

文月卿

おろしと花のたのしみなきをひき

百首書ゆゑに花のたのしみ

補政太政大臣
おとよきさのたをの
ふそはるゝしげのき

新古今和歌集卷第三

夏哥

題不知

持統天皇御哥

春さきく夏さきくきふゆの夜もとくわあはれ

素性法師

あけもさきくあけもさきくあけもさきくあけもさきく

更衣より久侍まね

大僧正慈因

しるしき花のまきも木かげそり事やとれ夏あか

まげとよりしきふふふふふふふふふふふふふふ

源道海

夏さきくさきくさきくさきくさきくさきくさきく

あけもさきくあけもさきくあけもさきくあけもさきく

白太姫又太史依成女

わが身とくさきくさきくさきくさきくさきくさきく

卯花め月よりつげゆきつげゆきつげゆきつげゆき

白河院清哥

うら花のしきしきしきしきしきしきしきしきしき

類一 題を

太宰大貳重家

卯のさきくさきくさきくさきくさきくさきくさきく

白河院清哥

式子内親王

わが身とくさきくさきくさきくさきくさきくさきく

あけもさきく

小侍三

待ふことの神のあはれいふまゝにふりて二葉ふらん
と敵膽田天皇の院の障子にあはれいふまゝにふらん

藤原雅經

野邊のうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

崇徳院の百首歌にふりてふ

待賢門院安藝

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

常祢好忠

花より一葉の木の葉をふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

藤原元真

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

延喜寺

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

柿本人麿

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

時鳥のうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

弁乳母

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

うさぎのうさぎは涙のふもとのうさぎにふりてふ

八月やうの花月夜にききこえしわかれのうた
とらふまゝにほくやう月夜にきこえしわかれのうた

中納言藤持

可憐いこゝろをいふるを侍て人のいふ屋をやる

大内臣能宣朝臣

おとめをうづめしききこえしわかれのうた

大納言經信

ゆゑをいふるを侍てききこえしわかれのうた

侍春園のうた

白河院御歌

かきこえしわかれのうた

歌不知

花園のうた

かきこえしわかれのうた

歌不知

歌不知

かきこえしわかれのうた

歌不知

歌不知

皇太子太子後戚

かきこえしわかれのうた

歌不知

かきこえしわかれのうた

皇太子

寛治八年 前太政大臣高陽院 哥合

周防内侍

来より頼もるる山がききし事の時を尋ね
海邊 郭よりしるし代もゆるる

桜密使公通

ゆきふきし山 郭よりしるし代もゆるる
百首歌をくくしるし 時を尋ね

民部卿光

郭よりしるし代もゆるる
八條院高倉

郭よりしるし代もゆるる
攝政太政大臣

後徳太寺九大臣家
十首歌をくくしるし

我よりしるし代もゆるる
かきしるし代もゆるる

前太政大臣

郭よりしるし代もゆるる
権中納言親宗

有明の月よりしるし代もゆるる
杜間郭よりしるし代

藤原保孝朝臣

馬に乗りて、八松郡公子と名けし神武天皇
額に「神武」を記す。為原家隆朝臣

為原家隨朝臣

心まじりて来りてし歌を傳へしものむとてあま
百首歌多しと云ふなり

武子肉親

夢をくもればは夜が来やそくくくくく
千二百五十今 檜中の云公祖

千尺萬里尋金
棒中的么徑

[illegible]

西泠印師

子に次しとせしむ。新まなほにけしきありむら
 時鳥ありき。三秋の初雪なりとてまじそ。小春のあけ

一家曉

後德泰守左兵部

五ノハカニシテ、
 又前歌人より後を傳へる上、夏哥といふは、
 五ノハカニシテ、

攝政大臣

うちをり昌浦より船をけりて目の前のなる橋
 木原よりせり百番哥り久竹より時

述懷
古之百首
哥之九行
多時

皇太后聖像成

ふふあやめのかほをききて我をさける袖のうき
月をききとてぬほりてゆきゆく人

大納言經信

わがこころを花の文にのりておぼえ
けが祢ろいとし人傳するまゝ月よと

ろくろふちあまうしてけりもなすも縁に
ほろろいふまゝにけりも

上東門院お將

ねて世のふかいふく思ふまゝにさうかたつて

や

はるか部

かふ事とあやうきとふくねとふくねとさう

山崎早苗といふさう

大納言經信

早苗といふ山田のきつてけりといふてさう縁にさう

釋阿九才候はるさうけりけりけり五月雨

楠政太政大臣

と山田といふさうなれとあてけりといふてさう

頼朝の御供

佐野大輔

いづりたのいふさうにけりといふてさう

大納言經信

いふさうにけりといふさうにけりといふてさう

前中納言連房

いふさうにけりといふさうにけりといふてさう

雨平木繁といふさう

藤原基俊

いふさうにけりといふさうにけりといふてさう

百首歌といふさう

入道前關白太政大臣

いふさうにけりといふさうにけりといふてさう

千首歌をてふりし時

お大僧ふ慈田

八月やふりしときをてふた神をたふりし神とてけ

懸るか

讀人ふ知

しらぬをきくわたりありまを移りしありありむ
時馬ふりし花のまよふふりしものやあふ

曾太右衛門大後成女

たり花のふりしをたふた神をてふのまよふ

有原家隆親臣

やうり花のまよふ梅のまよふのまよふ

守首人は親とふ千首歌をてふを候きし時

藤原之家朝臣

父業はつきのまよふ花のまよふのまよふ

堀河院御時よきものまよふ同月歌をてふ

そのまよふつきのまよふ

橘中納言國信

おまよふ月をてふ神とてふおまよふ

白河院御時

庭のまよふ花のまよふものまよふ

惠康法師

我やのまよふつきのまよふのまよふ

杉政太政大臣家百首奇合堀河とてふ

前大僧ふ慈田

うつみまよふつきのまよふのまよふ

寐蓮法師

うけいねだせりしやがふとやひともさるるか
白太座文木更俊成

皇太后文太史後成

大井のりやいづみ舟き夏の萩城跡

藤原定家朝臣

久方乃中乃河乃いふ候と其をいふ候に
百餘年を以て櫛政太政大臣

百有餘年之譜時權政太政大臣

「うぐいす」の光りまでお蔭の星と云はるる。

孝子親之

意ろく竹の葉を風をきくをたは後
馬羽く竹風夜涼を百事人の所ふ

馬羽之竹風夜涼以所書之

春文授史公繼

春文指史公繼

忘れりて、ふくしの風ふうがあるはたからうくまの木々

五十箇年をてしけり

大僧正慈因

しつてより、いふの、おそれ、月、か、冷、け、
 光、勝、田、天、院、の、陪、ま、い、き、て、い、く、あ、り、

氣勝曰天の院の隣より

左衛門督通光

是より月が明くわが心もささめぬ

家百首歌令
攝政太政大臣

橘政太政大臣

此乃夏夜之清涼也

[illegible]

行政大史に家老・侍哥とあるを以て

侍哥とあり

有家朝臣

とくしつに於て二つとも刻に始りて其の後の下法
題しとす 西の法師

道はつゝ志水ひかり柳をきりてとてくら角津と
うはけつわきせの草れきりてはやくするそら
東徳院百首奇とてよりきり時

有系法師朝卜

そのけし涼とありて夏夜ひかりきりあのおうふ
十六百首奇今 将中納言公經

病とありてむり打ちひきりてるわきりうらな
雲陽遠とていつかひけりえりきり

源俊賴朝臣

ぬりてきりてきりてきりてきりてきりてきりて

夏月とありて 後三位賴政

庭のきりてきりてきりてきりてきりてきりて
百首奇中と 我の月親と

夕ののきりてきりてきりてきりてきりてきりて
十六百首奇今 亦大納言忠良

きりてきりてきりてきりてきりてきりてきりて
百首秋とていつかひけりえりきり

攝政太政大臣

秋のきりてきりてきりてきりてきりてきりて
二條院讃岐

けしつとて涼とありてきりてきりてきりてきりて
當のきりてきりてきりてきりてきりてきりて

士丹忠見

伴はらへりしはらのしるしむきそめあはれ

五十首より内 杉政太政大臣

量る御澤をきくまの御めしむるゆふあき

刑部卿頼朝今ゆきう納言より内

後惠法師

林ありし山ききつて吹く物とわかれん

懼畏妻露滋くす事と

高倉院御寄

あふ露の目してゆきせのしら光りそふき

夕ふとあり 前太政大臣

白雲のふりしききくはまのふりしき

夏あきしきききき

百首より内 前太政大臣

そをわかれしきききききききききき

夏あきしきききき

前大僧正慈因

ききききききききききききききき

太林あきしきききき

太上天皇

山雲の林のありきききききききき

元治元年 入内屏風

入道前関白太政大臣

ききききききききききききききき

十六百多奇合 入内

其の二はとみのかのうけ初めとみのかのうけをうけ
百首を奉る内 前大僧正慈日
夏衣ふくむくみゆわが 衣やあはれむかひのそ
延壽寺四月決屏風

云々愚考

夏衣はくむくみゆわが 衣やあはれむかひのそ
延壽寺四月決屏風

延壽寺四月決屏風

新古今和歌集卷第四

秋哥上

題不知

中納言家持

秋のふりさけの山もみぢの吹ぬと秋のふりさけ

百首歌よりわかれのふりさけ

宗徳院御寄

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

藤原家通朝臣

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

文治六年女流入内侍御

後深寺女侍

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

百首歌より侍る中

藤原家隆朝臣

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

藤原家隆朝臣のふりさけのふりさけ

友原朝臣

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

百首歌より侍る中

白河天皇女侍

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

守覚法師親王のふりさけのふりさけ

家隆朝臣

秋のふりさけのふりさけのふりさけのふりさけ

千五百五十年

攝政太政大臣

ゆり草の露のしほをちりちりせりしうたをわがまかり

右衛門督通具

わく後又侍りしむし神の露のしほをちりちりせり

源具親

そいぬの枕のうへにそいぬのうたをわがまかりし初を

顯昭法師

水蓮乃とよみ草をわがまかりし初をわがまかり

越前

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

みす首等しくせりしうたをわがまかり

藤原雅恒

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

顯昭法師

右衛門督通具

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

崇徳院と百首等しくせりしうたをわがまかり

白太直主大夫俊成

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

中納言中將のうたをわがまかりし初をわがまかり

いぬをわがまかり

法性寺入道前実良

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

新

中務少輔平親

わがまかりしむし神の露のしほをちりちりせり

後德大寺左大臣

々々ハ秋の葉を吹飛ばしをよむ海ありなり
業徳院と百首秋をくくつり守り時

業徳院一百首歌子より守り時

皇太后太妃儀殿

秋の美しきなりとや秋風のそよぎは

七條院權吏

秋の風を思ふに

新と云ふて西親水子分りて是れは村村

風土記
為原經緯

同成るることを要するものなるを結を

百首詩
孝子親

[illegible]

新

ふとくひのわづらひのなをきこふも娘をゆ

大貳三位

わが国は、もとより、露の侵襲に、常に苦しめられてゐる。

曾祿好忠

胡弓をたう業の爲に終つてゐるのを

小野

[illegible]

運籌對河次屏風

七

紅梅三

明
不
7

亦

ふりしるうりさうふいぬりけり丹のうけりけり
う治前關白太政大臣家七ツのきりきり
きりきり

持大納言長家

うきうきふきふきふきふきふきふきふきふき
花山院時七ツきりきりきりきりきりきり

有原長能

神のりて我のりて水のりて天のりて地のりて
七月七ツ日けりきりきりきりきりきりきり

糸子補親

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
七ツきりきりきりきりきりきりきりきり

大寺大貳馬達

織女わかれきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり

小并

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
皇太后太政大臣後成

うきうききりきりきりきりきりきりきり
百首きりきりきりきりきりきりきり

武子内親王

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
家七百首きりきりきりきりきりきり

入道前關白太政大臣

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
七ツきりきりきりきりきりきりきりきり

持大納言公經

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
きりきりきりきりきりきりきりきりきり

待賢門院堀河

たゞく書きたるものの所候の秋の草を
女帝御子書

女帝徽子女

日くふくふ浪ふくわくふく海を渡る
本任能宣朝臣

大中臣能宣朝臣

伊とくちまのてしむの別入神より留
 中納言爲補家屏風貫く

中納言龜井家屏風之貫之

ぬれて今別處天の霧をらてさうゆふ
 城の院清の百箇歌の中を疾と見侍る

堀河院時百首歌の中、秋と久侍多。

前中納言通房

河津忠度のまゝとあるよりよみておくれ秋葉乃花
新しう次 從三位賴政

新
山
集

從三位賴政

平夜月長空
落月如野
林林
蒼蒼

新元記

檀僧正永緣

わゝ藤とてさへ月並花と云ふべし藤とてさへ
守實は親に乃中前哥に由るを云ふ

守實法親已乃中庸第一句也

頤昭法

花より神よりたゞ此尾上の言ふことなり
物より心なり
祐子同親且家紀倅

物之所在
祐子用親日愛純侔

人磨

煉疾乃赤々 野邊乃名場也 河赤々 七 赤々

中納言家持

昭和八年九月の秋藤王とすむともうふ

九河内新垣

秋の夕日さすくさすうららかに我衣もふくみの香

小野小町

昔をうとくしらの山をわたり林をうとくわたり

藤原元真

女帝花野のゆかりの影をうとくわたり

千六百七十五令 左近中将良平

松よりくさすくさす人の女帝花野をうとくわたり

蘭とくさす 公献法師

あつたあつたくさすくさす人の女帝花野をうとくわたり

宗徳院と百首并くさすくさす時

清輔朝臣

うさぎの足花のうさぎの足花のうさぎの足花

入道前守白太政大臣太政大臣のうさぎの足花

ゆき侍とくさす 皇太極太皇太后

いそやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

いそやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

大納言經信

花よりくさすくさすくさすくさすくさす

きくさす 曾祿姫忠

あつたあつたくさすくさすくさすくさす

あつたあつた

あつたあつたくさすくさすくさすくさす

坂上是則

うづつ浅草のいふがやのふれた物をばふうりぬ
人麿

こゝろ入野のこゝろ初庵花はつゝのたふふふふ
讀人不知

小倉山守のやうの花とて赤のふみゆわのふふ
女清寂ふ女王

かゝる女同もふ花とてふじとて花はつゝのたふ
式子内親王

花とてふふふ花とてふふふ花とてふふふ花と
攝政太政大臣百首并ふゆをばふふ

野をふふふふふ花とてふふふ花とてふふふ
八條院六條

秋のふふふ朝ふ花とてふふふ
左衛門督通光

あまふて野をふふふ入庵のふふふ花とてふふふ
前大僧正慈因

ふふふふふふふ秋のふふふ花とてふふふ
出家徳院清阿百首并ふゆをばふふ

身のがとてふふふふふ秋のふふふ花とてふふふ
大慈卿約家

林のふふふふふふ源重く女
林のふふふふふふ源重く女

林のふふふふふふ源重く女
林のふふふふふふ源重く女

藤原基俊

秋のやうにふくむて秋のふくむのふくむのふくむ
百首年よりふくむのふくむ

攝政太政大臣

秋のふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ
ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

家上百首年よりふくむのふくむ

物にふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

山路殊にふくむのふくむのふくむ

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

秋のふくむ

藤原定家朝臣

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

西行法師

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

西行法師とてふくむのふくむのふくむ

藤原定家朝臣

ふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

五十首秋のふくむのふくむのふくむ

たてふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

秋のふくむのふくむのふくむのふくむ

おふくむのふくむのふくむのふくむのふくむ

鴨長明

新女といふもの神ありていふの言ひは

西の法師

おはれふねいふものいふものいふものいふもの

式子内親王

うねいふものいふものいふものいふもの

類一はと

藤原長能

目くくくくくくくくくくくくくくくく

和泉式部

あゝこれいふものいふものいふものいふもの

曾祢知忠

わねいふものいふものいふものいふもの

相模

わねいふものいふものいふものいふもの

ははす入道前関白太政大臣家系今ね

友原基泰後

たねいふものいふものいふものいふもの

十五百重所登 右衛門督通具

あるものいふものいふものいふもの

ふく首等してはりし時枯同月とふ事と

皇太后太政大臣後成女

おはれいふものいふものいふものいふもの

守寛は親王の首等し候と侍せり

藤原家隆朝臣

あゝいふものいふものいふものいふもの

杉又太政大臣家の百首并合

藤原の家朝臣

風をけし海をよめる物いふやうにこそあるべき

水無瀬や十首并いともつゝ

左衛門督通光

しづかやいとも秋のこゑいふ風のとちよる

百首いともつゝ四月并

前太相公慈日

仔細を源くとも月并秋やともわともいふ

式部内親王

あるといふ秋やとも春やとも野井やとも月やとも

類へし

田騎院清奇

月影をの煤やともあともいふ物ともわとも

三條院清秋

足つ山のわいともいふてや秋の月ともいふ

雪間微月と伴ゆ事を

堀河院清奇

あはれやともいふあはれやとも光りともいふ月

形へし

堀河右大臣

人ともいふやうにともいふ月ともいふ物や

橋為伴朝臣

わかれともいふやうにともいふ月ともいふ月

法住寺入道前田冬春

風をよめる物のわいともいふやうにともいふ月

從三位賴政

少の世をくくしを身あそく時のも月とて
法性寺入通前常太政大臣家と月哥あり

いふゆきふ

太宰大貳重家

月とてわあといふとてあといふとてあといふとて

和帝可令と湖邊月といふとて

藤原家隆朝臣

あつた海や月の光のまじりたるがれ花とてあといふ

百首哥奉くもこれ秋のうたの中

前大僧正慈因

ゆきとてあといふとてあといふとてあといふとて

頼政

曾父左大臣俊成

さうとてわあといふとてあといふとてあといふとて

家隆朝臣

あつた海や月の光のまじりたるがれ花とてあといふ

百首哥奉くもこれ秋のうたの中

頼政太政大臣

あつた海や月の光のまじりたるがれ花とてあといふ

建仁元年三月哥令と山家秋月といふとて

侍

あつた海や月の光のまじりたるがれ花とてあといふ

月半とてわあといふとてあといふとてあといふとて

あつた海や月の光のまじりたるがれ花とてあといふ

月前松風

宗蓮法師

上東門院お廿将

おけいしるゝといふは妹の月日おけいしるゝといふ

和泉玄部

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

月とみくはういふ

藤原乾永朝臣

いふ人の神代より妹の月日おけいしるゝといふ

相模

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

永義宮年内裏奇令

大納言經信

月日おけいしるゝといふは妹の月日おけいしるゝといふ

秋田

左衛門持遠光

秋田おけいしるゝといふは妹の月日おけいしるゝといふ

崇徳院百首秋

左京大夫顯輔

妹おけいしるゝといふは妹の月日おけいしるゝといふ

類不知

道因法師

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

殷富門院大補

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

式子内親王

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

いふやういふいふは妹の月日おけいしるゝといふ

乙酉首年とあり

と

攝政太政大臣

まふれいひてさう林風と相なりて月とふれ

家二月乙酉歌とあり侍りて

月とふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

定家朝臣

まふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

新しう

右大將忠經

林風の秋とありて月とふれ

乙酉首年とありて月とふれ

攝政太政大臣

まふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

雨後月

文因卿

月とふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

新しう

右大將忠經

林風の秋とありて月とふれ

源家長

秋の月とふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

乙酉首年八月十九日相寄りて月とふれ

月とふれいひてさう林風の秋とありて月とふれ

林風の秋とありて月とふれ

乙酉首年八月十九日相寄りて月とふれ

右大僧正慈因

林風の秋とありて月とふれ

新古今和歌集卷第五

秋尋下

和尋可也人のこし尋侍々床

いふ人

藤原家隆朝臣

そりみりはらふ人のみちをいひてやいふ底のわ

百首尋そくしりい

入道九大臣

おろし底のわらうきこしりた上り月さそやあま

東蓮法師

野そで小那のまやわしそそふあはれ底のわ

類不念

後思法師

わらうきこしりあまの床のわらうきこしりあま

中書省通房

妻よの床のわらうきこしりあまの床のわ

惟明親王

人山の木のまをいひていひわらうきこしりあま

晚閑床と伴小事とい侍

左衛門内大臣

我のわらうきこしりあまの床のわらうきこしりあま

百首尋そくしりい

右大臣

そりみりはらふ人のみちをいひてやいふ底のわ

千五百首尋そくしりい 前大僧正慈因

かく床のわらうきこしりあまの床のわらうきこしりあま

家・寺・令・備・守・り・康・を・よ・め

権・大・納・言・後・忠

長・し・次・を・東・上・御・廣・の・妙・を・つ・こ・森・つ・の・露・を・御・

新・源・漸

社・を・つ・て・い・ら・く・成・れ・社・の・衆・を・明・や・め・を・北・の・

西・の・法・師

小・田・乃・つ・が・ら・く・妙・座・の・社・を・あ・つ・て・わ・れ・た・妙・座・の・

白・河・院・島・明・が・つ・ゆ・つ・う・田・家・社・興・と・作・

を・ゆ・つ・て・人・々・を・め・め・

中・法・大・支・師・忠

山・の・の・社・を・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・

都・方・の・の・の・の・の・の・の・の・の・の・の・の・

藤・原・類・總・朝・臣

い・ら・く・社・を・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・

を・つ・つ・つ・つ・

は・い・山・木・を・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・

社・の・因・縁・と・家・寺・令・の・の・の・の・の・の・

権・大・納・言・長・家

と・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・

楠・政・太・政・大・臣・家・の・百・首・寺・令・

前・大・僧・の・慈・回

わ・れ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・つ・

題・の・の・の・

秋・田・の・の・の・の・の・の・の・の・の・

前中納言通房

わきまはわづきの風の成しは田のいふ成るを

善清為政親臣

時をわづらふはうと思ふはわづらふは

中納言家持

今よりわづらふは成るを思ふはわづらふは

人麿

秋のわづらふはわづらふはわづらふは

こころの妻とわづらふはわづらふは

貫之

わづらふはわづらふはわづらふは

菅原太政大臣

わづらふはわづらふはわづらふは

草葉のわづらふはわづらふは

中納言家持

我ながらわづらふはわづらふは

惠土慶法師

秋のわづらふはわづらふは

人麿

わづらふはわづらふはわづらふは

天曆清平

おほつる野やわづらふはわづらふは

後冷泉院の人よりわづらふは

いふこと

堀河太大臣

わづらふはわづらふはわづらふは

因庭寂寂 住事と

奉後

一

たのぢもあきつゝもあふていそせりあのみきいとの露を
白河院よりおぼえあふれをいそせりあのみきいとの露を
つゝいそせりあふれをいそせりあのみきいとの露を
秋の紅葉とあふれをいそせりあのみきいとの露を
百首奇をいそせりあのみきいとの露を

疾速法師

物も小神もあふれをいそせりあのみきいとの露を
秋の奇の中 太上天皇

病の神物もあふれをいそせりあのみきいとの露を
野も病のあふれをいそせりあのみきいとの露を

願ひらふ

あふれをいそせり

守覚は親とす百首奇の中

家隆朝臣

ひの神もあふれをいそせりあのみきいとの露を
百首奇の中 式子内親王

あふれをいそせりあのみきいとの露を
藤原補子朝臣

秋風もあふれをいそせりあのみきいとの露を
弟大僧正慈因

あふれをいそせりあのみきいとの露を
千五百首奇令秋奇

樟中納言公經

一、あらたにあらはのふのきとてあらまらひしを
和奇の方今月よりふまにあらはし事と

杉政太政大臣

黒わもそ月やわらふより水津海弟よりあらは

大内卿

海よりあらはしそのきひあらはしあらは

千五百重奇令 定家朝臣

秋よりあらはし其のあらはしあらはし

樽衣とてなり 大納言經信

ゆかりあらはし其のあらはしあらはし

中納言藤原家屏風

賢之

りあらはし其のあらはしあらはし

樽衣のついで 藤原雅經

見よりあらはし其のあらはしあらはし

式子内親王

あらはし其のあらはしあらはし

百首奇とてなり

あらはし其のあらはしあらはし

九月十三日 木月よりあらはし

道信朝臣

あらはし其のあらはしあらはし

百首奇とてなり

藤原定家朝臣

いづれのおゑより花を養ふ内ふとて心を

攝政太政大臣大將に侍りし月年を十首

ませ侍りし

むもみ野人のうきまがうやそ病のともをなす月々

月年してしめしむ大納言經信

秋の衣をきりし月をいふ月のおもきとけり

九月はいふふ

わきり来りし月をいふ月をいふ月をいふ

平首歌ふとけり

常連法師

ひらけの歌をいふ月をいふ月をいふ

妹哥

太上太子

いづれのおゑより花を養ふ内ふとて心を

河勢といふ事

わきのやうな浪のうきまがうやそ病のともをなす月々

堀河院御内百首

信大納言公實

藤原公實の川霧よりいふてをいふ月をいふ

新

曾孫好志

山下の青い波のうきまがうやそ病のともをなす月々

清原深養文

わきのやうな浪のうきまがうやそ病のともをなす月々

人唐

・我が朝の義人等、いまだ秋風の吹くやありたり、
秋をやりていよいよ秋の深きなり、

九河内躬恒

初風の吹せ涼くわたり、
懐人不知

鴈のいづきをいそぐ、
西行法師

西行法師

いづれ秋の吹くや、
白きとくわたり、

みづ首歌、

お大僧の慈因

おどろく月の光、
お大僧の慈因

朝惠法師

朝惠法師

ひまやりの風、
吹ぬふき井をり、

皇太后大天後成女

吹ぬふき井をり、
情あせり、

山路秋の、

家隆朝臣

秋の神、
平菊、

文内卿

文内卿

おどろく月の光、
鳥羽院、

しづむ、

花園太大臣

和号所々山苗号作うより時殊
前大僧正慈日

秋の夜更けに
暮れゆく月と風

長月といふのは、成りて浅弟、長月のいふのは、
攝政大臣大橋の長子、時百、新しき名を

疾速法師

此のまゝにちやうど

中務卿奥平親己

作ののりよりさやに横きはるるありと
如葉の霜と作すと

高家院

淡路のちもふたつていふ所也
秋の哥をうら
八陸院高倉

神功のこの本と云ふが、此の時と云ふ
宇麻呂天皇院の降よと云ふ所は、

太上天皇

い河村青木の書に見えて山田の書の時と
入道前南白太政大臣家百首奇しくなる

10

皇太后聖訓

うゑに松竹の如く
大井河の如く
てみちの如く

藤原南平親任

おきまけくちんらんうの葉とわしはめめりふ決を

類一ら次

曾孫好忠

合じとらんし(の)せあふるるも木の葉よりけ

百首并ふとてけり

と兼

ま内口

新田けりや幸ふらんをけりてめめとみきめり

た大將上侍より内家より百首并ふとてけり

柘とてけりあり 攝政大政大臣

くそあはけとてやううと森のくそあはけとてけり

室家朝臣

月より浪りあふ侍よりけりてけり

陰より繪とわきとてけり

後頼朝臣

やうらうらとやうらうらとけり

百首并ふとてけり

式子内親王

桐の葉とてけりてけり

類一ら次

曾孫好忠

今頃風の木葉よりけり

守覚は親王とて百首并ふとてけり

春文持大支公継

りて風の葉よりけり

十五百首并ふとてけり

高きとけり

能國法師

夏年のりそふとて小と難波の浦に秋を言ふ

くまの秋あり事なまらふ

守覺法師

秋ふとて秋とてみんりてより大霧の冬

同九月盡のうらふ

前太政大臣

秋ふとて秋とてみんりてより大霧の冬

新古今和歌集卷第六
冬歌

千五百番 冬令 初冬のころとてふ

皇太后及太皇太后

を来あけの日の神のあはれももて冬やまは

天曆神時 神皇月やいづてはふとて

平つらうとつらう

藤原高光

神皇月やいづれのころとてふ物もあは

新古今和歌集

源重光

あはれやふとの海よりいづれはあはれ

後冷泉院神時 一のころとてふ大井河

ゆりて 藤原資宗朝臣

大御言 恒信

代きよとてふとてふとてふとてふとてふ

大御言 恒信

らうとてふとてふとてふとてふとてふ

大井河 恒信

大井河 恒信

たてまきとてふとてふとてふとてふ

大井河 恒信

後頼朝臣

日うつらとてふとてふとてふとてふ

大井河 恒信

後頼朝臣

そのはしりし物なるのふし木の葉もくさるるを

春日社奇令のふし葉といふ事とていふまじ

春日 前大僧の慈因

木の葉のつるをふかく神のまをりしとていふ

右衛門督通具

この葉のつるをふかく我神といふ木の葉のふしとていふ

藤原雅恒

うしろのつるをふかく人なをりしとていふ

七條院大納言

初めの木のつるをふかく葉とていふ

信保

雨の神のつるをふかく木の葉といふ

藤原秀能

木の葉のつるをふかく木の葉といふ

新部源成

冬の木のつるをふかく木の葉といふ

冬木の葉といふ 冬木の葉

木の葉のつるをふかく木の葉といふ

頼輔卿の家系といふ木の葉といふ

右京資隆朝臣

時雨の木のつるをふかく木の葉といふ

時雨の木のつるをふかく木の葉といふ

木の葉のつるをふかく木の葉といふ

津守國基

傳ひてふとて案文のふうしきも木に記の事柄を

西行法師

月とていそ根の雪ふれたりとありて云々

前大僧正覺念

秋と月木の紅葉うつりてなすれのみふしき

清輔朝臣

葉のやうに日の新なりとていふふとていふらん

山家阿闍梨といふらん

藤原隆信朝臣

雪とて清く雪とていふ葉のやうにふしき

寛平御時といふの文の事

僧人といふ

清く雪とていふ葉のやうにふしき

中務卿奥平親王

木とての雪ふ時をていふて紅葉のやうに

中納言龜楠

叶ふつとていふ葉のやうにふしき

十月よりいふ葉のやうにふしき

能因法師

叶ふのやうに雪ふていふ葉のやうにふしき

清原元輔

冬とていふ葉のやうにふしき

鳥羽殿といふ葉のやうにふしき

後白河院御哥

向うなり末の序ふ様神て可なりやうと云ふ
時雨 前大僧正慈日

や、可なりもの、神のつて、末の葉のしら、夜、

冬、年、の、す、か、 太上天皇

ゆ、人、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

形、の、ま、い、と、 人麿

可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

和泉或部

世、中、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

百、首、年、の、ま、い、と、 二階院讃岐

可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

西、の、け、は、師、の、ま、ん、ま、い、の、

わ、い、れ、や、い、の、ま、い、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

道、田、は、師、の、ま、ん、ま、い、の、

可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

千、の、百、の、年、の、ま、い、と、 源貞親

今、ま、い、の、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

今、ま、い、の、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

後、恵、け、師、の、ま、ん、ま、い、の、

人、の、ま、い、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

百、首、年、の、ま、い、と、 入道大匠

は、ま、い、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、可、なり、の、あ、ま、い、の、神、の、ま、ん、ま、い、の、

千五百番奇令を奇

二原院横波

せりありふりし物とてきつてしる初め

源信明朝臣

源信明朝臣

かゝる明の月月新の紅葉ゆきありとふりて

中務卿具平親王

ふりて新の紅葉ゆきありとふりて

巨秋門院冊後

吹くふりての後の月もあまの葉とて月やわ

吉田村奇令後月より書

石門院通具

ふりて神の影のりよりありとふりて

ふりて神の影のりよりありとふりて

和子あかくい首奇令より書

藤原家持親王

ふりて神の影のりよりありとふりて

源泰光

源泰光

ふりて神の影のりよりありとふりて

千五百番奇令

源具親

ふりて神の影のりよりありとふりて

源具親

源具親

ふりて神の影のりよりありとふりて

五十首奇令より書

源具親

源具親

ふりて神の影のりよりありとふりて

ふりて神の影のりよりありとふりて

雨後冬月、いづれより

良暹法師

今いて神の物と云くは、
新らに

曾祿奴忠

新霜の物と云くは、
新大僧の慈田

新大僧の慈田

新霜の物と云くは、
西の法師

西の法師

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

新霜の物と云くは、
藤原惟恒

藤原惟恒

藤原惟恒

新しき病の身にも思わぬ病ありては身も
橋上霜といふまじき見ゆあり

はる幸清

あつたは神もやあはれな月とては
源重久

夏より秋のありてはしるしとて
道信朝臣

さあきてきり（し）きききり（し）の
冬よりの中 太上天皇

冬よりの中 太上天皇
百首よりとてしるしとて

攝政太政大臣

あつたは神もやあはれな月とては
紫徳院時百首よりとてしるしとて

攝政太政大臣

あつたは神もやあはれな月とては
冬よりの中 太上天皇

あつたは神もやあはれな月とては
冬よりの中 太上天皇

あつたは神もやあはれな月とては
冬よりの中 太上天皇

あつたは神もやあはれな月とては
冬よりの中 太上天皇

あつたは神もやあはれな月とては
冬よりの中 太上天皇

うゑのなみこもわさしゆらんいそ

延喜寺

町内より移り野の花がねを露のうらまへに咲か
延喜寺四年尚侍藤原湯まゝもあふむせり

中絶言直補

もの花あふむ初めのとれりこをさめりけれ

同濟時奔河の事ゆるり日

坂上是則

新ら今とてのうはる浪のそとやあやそん

和泉成郡

野邊と新花と水のけりいそもこの冬成そや

西行法師

清の園の難波のきききわわの秋後野田の

紫法院十首寄りてもふる時

大徳言成通

冬も成そし難波のきききわわの秋後野田の

西行法師

わはひふるる由やこの冬はうらうら

唐前日母

東海より冬のきききわわの秋後野田の

冬寄りても侍り

曾見は親日

ひーふふの秋の床にそを涙とけりそそのよみ

百首歌などありて

そらゆり山ははるかにて松のしきたてが
新ら歌

東太原家史後成

さくらり山ははるかにて松のしきたてが
杉政大政大臣

浦よりあふくふ水めあきりて松のしきたてが
松や神は波はきりてしきりて松のしきたてが

水きりてしきりて松のしきたてが
百首歌などありて

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

松のしきたてが
松のしきたてが

郭一

前人

うへに玉の衣の袖をいふ松がある。また、松のうへに玉の衣の袖がある。うへに玉の衣の袖がある。うへに玉の衣の袖がある。

はかのういふまゝに書きたるにせむ

停滯大補

ひきつゝ東方を飛んで又馬に上るなりつゝ又馬に上るなり
みちのくちをゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

みづのうみをきく時と見ゆ

能因法師

久々終迄不_レせしむる所の野田のむすもむす
新ら次 重く

郭子儀

1900

大徳寺大徳寺大徳寺
 大徳寺大徳寺大徳寺

[Faint bleed-through from the reverse side of the page]

續德大寺九大臣

子馬浮りぬ
 糸流のちり

2

地河院、百首奇くなく、字あり
祐子同親王家化傳

10

秋子同親之家

浦内ゆきあきの海の瀬まにけりしけり
云々前秋ふとよりしけり

平首秋

10

備政大臣

新刊

映上のさくら

千六百の歳令、三位を能く
兼ふり、大長に御ついでに
中月之方、

り、之を裁じ

Antennaria dioica

寂勝天竺院障よりなりとの浦よりなる
藤原朝能

藤原為能

風をきくやうにうしろをむいてうしろ浪をかき寫
すといふ

5

九律門書通考

浦合の月より書おのりい、あつ神よりあつなり

文治六年女浦八内屏内

正三位まね

風はしるしに、風のひる鳥をそら井六渡のうらめさう

る千首年よりてよりいへる

藤原雅經

くわやらていへる、あつなり、あつなり、あつなり

堀河院は百首歌よりてよりいへる

河内

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

あつなり、あつなり、あつなり、あつなり、あつなり

あつなり

あつなり

持中簡言長考

初書のうの神板うのを授へておしひし野へ冬よりす
おふ事ゆきとくし書のうのゆき日

世或部

おたぐうのうのうの世とておとふたはゆき書

百首弄

式目類

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

系連法師

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

皇太孫系大文部

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

後述者大臣

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

前大納言公任

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

刑部卿兼

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

高倉院卿

あふきのうのうのうのて初書うの書の一は

入通前書右大臣にゆき内家うの書をう

とて上東門院の御方女御に侍りて

藤原家恒朝臣

山王の御方女御に侍りて

野宮の御方女御に侍りて

藤原家房

山王の御方女御に侍りて

百首の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

攝政太政大臣大納言の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

藤原家朝臣

山王の御方女御に侍りて

藤原家朝臣

皇太后太皇太后

雪やふふ雪のふりては月も見えぬ天のふりては

たゞうらけ

小侍後

おきこもりあまふ雪のふりては月も見えぬ天のふりては

前大僧正慈因

庭の雪や我れも雪のふりては月も見えぬ天のふりては

曾祿奴忠

冬まはせられ人の今もふ雪のふりては月も見えぬ天のふりては

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

麻然法師

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

百首奇歌

太上天皇

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

右衛門督通具

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

宗徳院御哥

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

因次郎御哥

近衛基経前大僧正

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

京松園前太政大臣高陽院御哥

前中納言通房

雪のふりては月も見えぬ天のふりては

鷹狩のしるしと見侍る

右近中将云彌

おろしき御方よりお見えなすといふは月のよき日
増大と見侍る 持僧正永録

中よりふくえぬくく火のいそひかみせなる

百首歌なり

式子内親王

日数ありおきふらつてふは海の輝きよりおきふらつて

紫雲のふけきなり

西行法師

おのけいといふとふくふくわくわくといふとふくわく

いふとふくわくといふとふくわく上門院兵衛

ふくわくといふとふくわくといふとふくわく

白太夫大史後感

ふくわくといふとふくわくといふとふくわく

太納言隆季

あつてふくわくといふとふくわくといふとふくわく

後感の家十首并いふ侍るに歳書ののこ

後惠法師

おきふらつていふとふくわくといふとふくわく

百首より時

小侍従

おきふらつていふとふくわくといふとふくわく

類なり

西行法師

ひつとふらつていふとふくわくといふとふくわく

橘政太政大臣

張のこゝろをいふ事とて一類なりといふのころとてい
前大僧正慈因

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
權律師隆聖

朝のあけのけとていふ事とていふ事とていふ事とてい
百首奇とていふ事とていふ事とていふ事とてい

入道大匠

何れとていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
の言とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい

和泉式部

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
入道前内侍大臣百首奇とていふ事とていふ事とてい

入道前内侍大臣百首奇とていふ事とていふ事とてい

後徳太寺大匠

石とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい

友原の家の朝臣

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい

東蓮法師

十五百首奇

とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい
とていふ事とていふ事とていふ事とていふ事とてい

曾太原文太史後成

新古今和歌集卷第七

賀正

みはきとしのりきけてふとあけとけりて

仁徳天皇御年

高座のりてまねの煙ふくのふりきつひなり

新ら歌

懐人不知

初春のり初めふのふりきふとあけとけりて

み日とあけ

藤原清公

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

賀正

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

賀正

初めふのふりきふのふりきふとあけとけりて

六條太大臣

孝代のりせの次とくわかくりゆえのりき
天喜元年甲辰文の哥令一統のや成るを

前大納言隆國

とるのえよあひふ杉枝とふえくをのひとる

寛治八年開留前太政大臣高陽院哥令院

の心と

康資の母

く津代と杉を山のきしとえをいのりきき

後冷泉院がくわくわくゆくつ時印教の杉

と入のくくはくせありこりんはる

大藏三徳

あひといのりゆめあ杉今一とあのみはく

永保四年に裏み月

大納言隆信

杉のいふくあ杉の杉原とてわくわく

権中納言通俊

子目つる杉のこ杉とくくく年のとくくき

兼暦二年丙申の哥令一統のや成るを

前中納言通房

孝代のりせの次とくわかくりゆえのりき

部一と次

讀人不知

孝盤がく杉とくわくくくく年のとくくき

二條院御時花有表色といふ杉人つる

けりきと

刑部中納言

建久七年入道前守太政大臣左大臣

哥もめを侍りし 前大納言隆房

うねりやうく神にひんふり多きなり之の橋場

永應元年入道前守太政大臣左大臣河内
久澄といふ事と人より侍り侍り

清輔朝臣

年より之の橋守事とていふ所あり

日右祿家成件七十なり侍り

ひそりし津のくぬ松ありしと云ふなり

有首秋より侍り 後徳大寺大に

やきし廣大なりけり

春祿のり成り侍り

松政春政

吉田文のりしと云ふなり

天曆御時大書會に奉り侍り

讀人

これよりし中しと云ふなり

長和五年大書會に奉り侍り

桑子補親

わねりし相なりしと云ふなり

永承元年大書會に奉り侍り

いより侍り 式部大補資業

いより侍り

寛治二年太宰會所風光とありと山とあり

山中納言庭房

とありゆきの山の上はくさき草ばかりとあり

久壽二年太宰會所悠化方風光とありとあり

山とあり
文内卿永範

とありが春後の山の上とありとありとありとあり

平治元年太宰會所基置辰日春入言あり

野とあり
刑部卿兼

おほえふとありとありとありとありとありとあり

仁安元年太宰會所悠化方とありとありとあり

播磨守
源太師兼左後藏

ありとありとありとありとありとありとあり

元暦元年太宰會所基置春日とあり

式部大輔光範

とありとありとありとありとありとありとあり

長承元年太宰會所基置春日とありとありとあり

田村とあり
権中納言白光

承和元年とありとありとありとありとありとあり

建久元年太宰會所基置辰とありとありとあり

権中納言資實

市堅かりとありとありとありとありとありとあり

新古今和歌集卷第八

長傷二首

題不知

僧心通昭

とある病をいひけや草のとしはれなう成人

小野小町

わし我身いそやわし我身いそやわし我身いそや

醍醐のふとをいそやわしのりやわしのり

とあり小三陸右大臣よけり

中納言五捕

わし我身いそやわし我身いそやわし我身いそや

西暦二年原国の春とては梅雨のとき通信朝

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

大ねあ言

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

とあり小三陸右大臣よけり

大東大史題補

推し花のふちをとりていりてくわゆる林の中

公守朝臣母のゆりて後のまは金剛院の花

とて

後徳大寺大信

花をいへりてふりてふりてふりてふりてふりて

這家朝臣母の思ひ侍りてふりてふりてふりて

構政太政大臣

喜家とてふりてふりてふりてふりてふりて

前大納言先頼とてふりてふりてふりてふりて

とてふりてふりてふりてふりて

前大納言先頼

いりのり煙とたふりてふりてふりてふりて

六條橋政とてふりてふりてふりてふりて

のりとてふりてふりてふりてふりて

て侍りて

太宰大貳重家

ふりてふりてふりてふりてふりてふりて

おきかふりてふりてふりてふりてふりて

昌浦とてふりてふりてふりて

高陽院本傳やふ

昌浦とてふりてふりてふりてふりてふりて

かき事ゆきとてふりてふりてふりてふりて

上西門院兵衛

ふりてふりてふりてふりてふりてふりて

昌浦院とてふりてふりてふりてふりて

月有會嘉門院ふたてふ連つら公

九條院

[illegible]

9

曾嘉門院

乃いふをば、校の父が、かゝる福を、是で、

美竹堂女公子小けりし萩原為頼様

おのれ海より上りて

小野亥太郎

我軍下都ノミナトニ至リテハ

9

藤原賴朝

くまのあそびの歌

小節内侍病と云ふ疾より尋常なるに

系しるふ

東江

石象

和泉武邦

五ノ部止りきりてきて大に成りては

四

上東門院

たふやうな物に、たふやうな物に 祝いのちの歌といふものがある

白河院時中家也。一より後その由を

葉のこまきうてゆるく七月より八月の露

同防内侍

海軍兵隊の支那の海軍

一、子孫の 教育 に 力 を こ め て し の 事 に 力 を こ め て し

一、清信子

神より神のいふを承りてきくわたりて神を
まじりて事なりとて承りて神を承りて
日一東門院中系とて承りて神を承りて

一條院御奇

わく風の病の病なりふまじりて承りて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

大貳三位

日一神より神の神なりふまじりて承りて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

を承りて神の神なりふまじりて承りて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

清煥公

を承りて神の神なりふまじりて承りて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

和泉親部

神定より神の神なりふまじりて承りて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

知是院入道前田良家

神のいふを承りてきくわたりて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

指中納言俊忠

神のいふを承りてきくわたりて神を承りて
神のいふを承りてきくわたりて神を承りて

國とふく

後德大寺九大臣

母の力有りては誤識のつておとすを
 しめ侍り 曾夫唐太史後成女

曾太后受太史後成女

今更に主母の御心を痛みてこそ泣きあは
しき方なりと云ふ秋野のけしきとて心な
けしきなりとて定家朝臣

定家朝臣

玉の露は海より湧き来たりて空より秋を
父老宗朗よりての秋寄風懐舊を以て
も侍り
藤原家能

侍方

藤原為能

竊とふかゝるに古衣を子神祇つねハレ

社

又我内大臣をゆづせて侍多し。此秋南河内大臣中將を偁る時ほつりきり。

殷富門院大埔

秋より春迄は休むが、おのれがくまなく天下の衆の身
也

古清門內大位

[illegible]

大納言實家

ナニと秋のふきりこを被ふ人のそは夢をうけ
見らのふきりけり時野中よふふれり
けり侍々をとりせぬをれいふとて中時乃
とてとてあはれふゆふふゆふの人をい

おとこ

物は實方相長が事と云ふは冬のとて
ておれりといふは物のくもりておれり
物なりといふは物なりといふ

西行法師

くちとまわの若くともとまわし野のくもり
因りてくもりてくもりてくもりてくもり
てくもり

前大僧正慈因

くちとまわの若くともとまわし野のくもり
因りてくもりてくもりてくもりてくもり
てくもり

中興法師

くちとまわの若くともとまわし野のくもり
因りてくもりてくもりてくもりてくもり
てくもり

能因法師

くちとまわの若くともとまわし野のくもり
因りてくもりてくもりてくもりてくもり
てくもり

定方朝臣見しより十月神白河の宮より
移りたりと紅葉のいふのふりともを

前大納言公任

ふみくやふし山里のふりてふはれりて
十月よりいれむは前大僧白蓮因の
とてわきて何ふふとてはりて次の
一の神女月と帝の奇あふとてはり
けりや

太上天皇

おのちありて某の久遠とてはれりて
はり

前大僧白蓮因

ふみくやふし山里のふりてふはれりて
十月よりいれむは前大僧白蓮因の
とてわきて何ふふとてはりて次の
一の神女月と帝の奇あふとてはり
けりや

雨のときとてはり

太上天皇

おのちありて某の久遠とてはれりて
はり

相模

おのちありて某の久遠とてはれりて
はり

太上天皇

おのちありて某の久遠とてはれりて
はり

馬内侍

わ

源三位

おとろえり 煙工ゆいひてしととかりきの子を
大に素言に月夜とてふてふらとて誰の
なりえのわのう葉をいんくふら
くろけ國とてや成るりとて

能國法師

わさしふの命とせし誰のわふ地とて
新ら成 大に近衛親臣

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
後頼朝長身ゆてはつたをまらけを傳
はくせゆてはつた新ら將

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
わさしふの事とせしなふらやうつわわ
わさしふの事とせしなふらやうつわわ
わさしふの事とせしなふらやうつわわ

櫻塞使公連

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
禰ま内親とてまはるくはる内親とてまはる
わさしふの事とせしなふらやうつわわ

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
トゆきり 中院大夫臣

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
権中納言道家母とてまはるくはる内親とてまはる
わさしふの事とせしなふらやうつわわ

わさしふの事とせしなふらやうつわわ
限ふまはるの事とせしなふらやうつわわ
わさしふの事とせしなふらやうつわわ

や

横政太政大臣

今もやとてよれども我等もそとをきく事ありけり
母の御いふやうに、し又やかりき人の御い
ふも、いひて侍多候は、うき世の

清輔朝臣

世にやとてよれども、いひて侍多候は、うき世の

安常の心成

西行法師

侍津がまに、いひて侍多候は、うき世の

大僧の慈因

みかへ、いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

いひて侍多候は、うき世の

はくしきふねいしきふねのあきこときふね
たに中將通宗、墓所をゆりてゝ侍々

吉澤内大臣

とくしきふねいしきふねのあきこときふね
首快は親王、親王の周忌のてゝ墓所を
ゆりてゝ侍々

前大僧正慈円

たに中將通宗、墓所をゆりてゝ侍々
母のそとあきふねの家を佛供養、ゆ
りてゝ侍々
はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね

右大將忠經

又侍々

はくしきふね

はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね

祇部成伴

はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね

藤原通房朝臣

はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね
はくしきふねいしきふねのあきこときふね

信子

校中納言通後

之了れく者なり海のくわさく移之
 堀河院くし結て後まわ

堀河院之跡で後より

積中納言國信

更ふてうゝふたふと、素柳のうゝふたふと、

いづれ女山にゆくぞや

ほつてふふふ 井で待つふふふ 井で待つふふふ

京へ下りて曉つて馬を乗せんとす

侍
左京吏題牒

作人の自筆と云ふに、まづ、

あ、の、う、い、ち、と、う、ろ、を

卷之四

...

卷之四

新

くわんていしん

筆

ふくもとのふくま

[illegible]

五

何れも、
たゞし、

ありきやうな文を

まの おく へ へ へ へ

中世

その(新)字を

五喜清哥

葉平朝臣

小野町

中飲害急補

打草のむすのいれはききまはるる

新古今和歌集卷第九

離別哥

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
てい侍り 此首より

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも
あはれふくくしりゆきく人ふりてきこも

如

康順法師

此後又三書の事となるが、平くは事とありて、後
題不知 源重之

題不知

源亨之

石河守一のけしき、ふきもとゆきをききながら
 又そのふきもたふしてゆきそう、時花束
 の詩はききながら 高階重朝

の許しをうけ

高階重朝

約はあふ川よりせは信主と申ふべし
藤原範永御后

7

藤原範永郎后

君とてあふ海河より要するなりとて銭を引
太宰師諮家より金とありて成る事

太宰師清家より信玄あすの事

杜松子酒

18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 528
 529
 530
 531
 532
 533
 534
 535
 536
 537
 538
 539

子学院

素性法師より、
 行儀のしるしを、
 かへりて、
 持て、
 せう。

一隆太大臣

神玄月す襖乃のしるしをて襖てふとふふ流るゝ
 部 屋 々 大 江 千 里

23
附

方以千里

日蓮の法よありしを思ふことなり
 成尋法師入席 伯耆のふとむろ

成尋法師入唐傳書之

晩鐘といふを聞ても人のこころはうきなり

晩刻とて、今日て人のまふじやうき

通命法師

俄に高き山に登りて、
かじりて、
續人より、

ちりりたる事、
別乃の儀より、
後惠法師

ちりりたる事、
登蓮法師

守貞は親とて、
板原隆信朝臣

守貞は親とて、
後惠法師

守貞は親とて、
登蓮法師

守貞は親とて、
板原隆信朝臣

守貞は親とて、
後惠法師

守貞は親とて、
登蓮法師

守貞は親とて、
板原隆信朝臣

守貞は親とて、
後惠法師

守貞は親とて、
登蓮法師

守貞は親とて、
板原隆信朝臣

新古今和歌集卷第十

四橋板寄

和銅三年三月ありしにえりりのおき

ふりぬきとれ 元明天皇御寄

龍馬のあきしとまてぬきとれりみえりあえ

天平十二年十月伊勢國のこゆきとれ

たつ時 聖武天皇御寄

伊とふあひのちろとふせとあひのちろかきけり

とろしとてしる侍り

山上憶良

いこしとてぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれり

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

大納言板

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれり

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれり

業平朝臣

ぬきとれりぬきとれりぬきとれりぬきとれり

ぬきとれり

げん

さうさう津の山のうすき着きしはあふりり
近き津の山風の奇習る

東枕ゆせむく成るなり衣なりなりやまは
なりなり

さうさうのさういなりなり山のみなりなり
さうさう

あつさうのさういなりなり山のみなりなり
なりなり

なりなり
女御殿みどり

なりなり
後原捕郎

なりなり
なりなり

なりなり
なりなり

なりなり
なりなり

なりなり
なりなり

なりなり
なりなり

なりなり
なりなり

第一

弗形宣旨

あゝくちのきさうちをサといひがふまふ
入唐一ゆるり何うがふちをサといひ

為記

法橋齋然

[illegible]

とて津のふりてあそびなふ舟と海

是も侍り

為臣實方朝臣

舟よりこゝろの接祿をこゝろ陳の浪に夢をひて

[illegible]

いふより同好といふより多ぶるなりと云ふの

も命を失ふてゐる。その時の苦しみは

七、（一）

大僧正錄考

我々も後上を称いあはせぬ人々なりと云ふ事

此是為德之天下以天下為家

子てゝゐるが
長成部

吾人より其の良の所を以て其の不善の所を以て

[illegible]

寺工主より名を親修と改め

肥後

こゝろあててあしをくみ浦をわたりて浪のまぎ

據哥々々々侍々
大納言徑信

を祿で懐くゝの志あり

南溪先生

三ノ月には

後冷泉院御成敗の御成敗に依りて格付し給ふ事

大進中将隆經

おれ此葉より少志の山に平家より来りて候と云ふ
おのゝ侍より人々を召して後より召し給ふ事
いふとまりりけり而も召し給ふ事
てうとて人のいひて候事候へり候事

赤澤東門

何れも世のいひ格にありけり赤いり候事候へり
堀の院百首歌に 格付の言國信

うらんとて召し給ふ事候のありけり赤いり候事候へり

大納言師頼

あはれい格のいふありて候事候へり

水邊格付の言國信

源師賢頼經

いふなり候事候へり格付のありけり赤いり候事候へり

大納言恒信

格付のありけり赤いり候事候へり

格付の言國信

修理大史顯家

格付のありけり赤いり候事候へり
凡そ乃より格付のありけり八月十五夜に候事候へり

あてたまの女房のふけり

橋本仲朝臣

今より浦世をあらはしむるに秋の月

まゐりの院といふやを霧中見月といふ

大に初言

京杭のそとよりまゐりてくみくみの月をねん

守定清親の家より首言の向をねん

白太無家史俊成

夏より秋の月をねん

そより秋の月をねん

藤原定家朝臣

今より秋の月をねん

藤原定家朝臣

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

秋の月をねん

和奇市月十首奇合のいゝと月市梅伴
をうゑんくはうゆつり

播政太政大臣

けしきけしきなりてかおるなりと物成りて月

梅伴とていふなり 前大僧正慈因

おはしりの和のひさびさなりと月市を

海濱重夜といふ事と見ゆ

和奇

伊く和奇とていふなりと月市を

百首奇といふなり

恒秋門院丹後

あつちとていふなりと月市を

和奇といふなり

前中納言通房

いふなりとていふなりと月市を

持中納言定頼

いふなりとていふなりと月市を

百首奇といふなり

或の内親王

いふなりとていふなりと月市を

和奇といふなりと月市を

あつちとていふなり 皇太子太政大臣後成女

いふなりとていふなりと月市を

梅伴といふなり 持僧正永縁

いふなりとていふなりと月市を

ゆゑといふべしとけのりよりとてふふのあやひをわ
る清の奇令と後者此といふ事と

若し彼の床よりとていふていふや好ましく思ふ

後者といふ

藤原業清

誰とがわやとのふとらありてけりわやとていふ

羅中父といふべし

鴨長明

枕をいふの事よりとていふべしとていふの事

東のふゆよりとていふべし

民部卿成範

いふる所の事よりとていふべしとていふの事

かゝる所の事よりとていふべしとていふの事

神皇正統記

いふる所の事よりとていふべしとていふの事

後者の事といふ

若原秀能

いふる所の事よりとていふべしとていふの事

攝政太政大臣家奇令と後者といふ事と

定家朝臣

いふる所の事よりとていふべしとていふの事

百有秋奇令と後者といふ事と

家隆朝臣

いふる所の事よりとていふべしとていふの事

いふる所の事よりとていふべし

ありし所の事よりとていふべしとていふの事

奇令と後者の事といふ

通事右大臣

日とてはまた也との浦のいゝ浪りやうきとあはれ
堀河院御時百首奇子とてうらやまの奇

藤原頭仲朝臣

いゝとて我身ふりあはれとていゝとてあはれとていゝ
入道前國司家百首うらやまの奇

白太政大臣後成

難波のあはれとていゝとていゝとていゝとていゝ
僧正惟親

あはれとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
前右大将頼朝

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
述懐百首奇子人侍

白太政大臣後成

白太政大臣後成

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
宣秋門院丹後

あはれとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
天香寺とていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
江口とていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

世中といふとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
梅女妙

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

あはれとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ
和方とていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

いゝとていゝとていゝとていゝとていゝとていゝ

定家朝臣

神とあをりしれはし祇の身平ありていもくせ

家隆朝臣

松杉より長らひゆるせういの山家とみ成候とゆふは

詩を弄しあはせゆゝ山路秋好とつるきを

定家朝臣

まゝや今や衣よりいの山に衣をてふはくのをそそり

鴨長明

神より月と花とを地衣とを溪源はさやうはの山中

常大僧正慈因

とそつゝ山煉ゆくの神衣をあらわしとあはれをうり

百首弄とてきりり一時松奇

あはれゆふはくせういふはくせういふはくせういふはく

やうりてゆきうきとゆきうきとゆきうきと

兼光法師

あはれはくせういふはくせういふはくせういふはくせう

わはれはくせういふはくせういふはくせういふはくせう

新法師

年がきりてふはくせういふはくせういふはくせういふはく

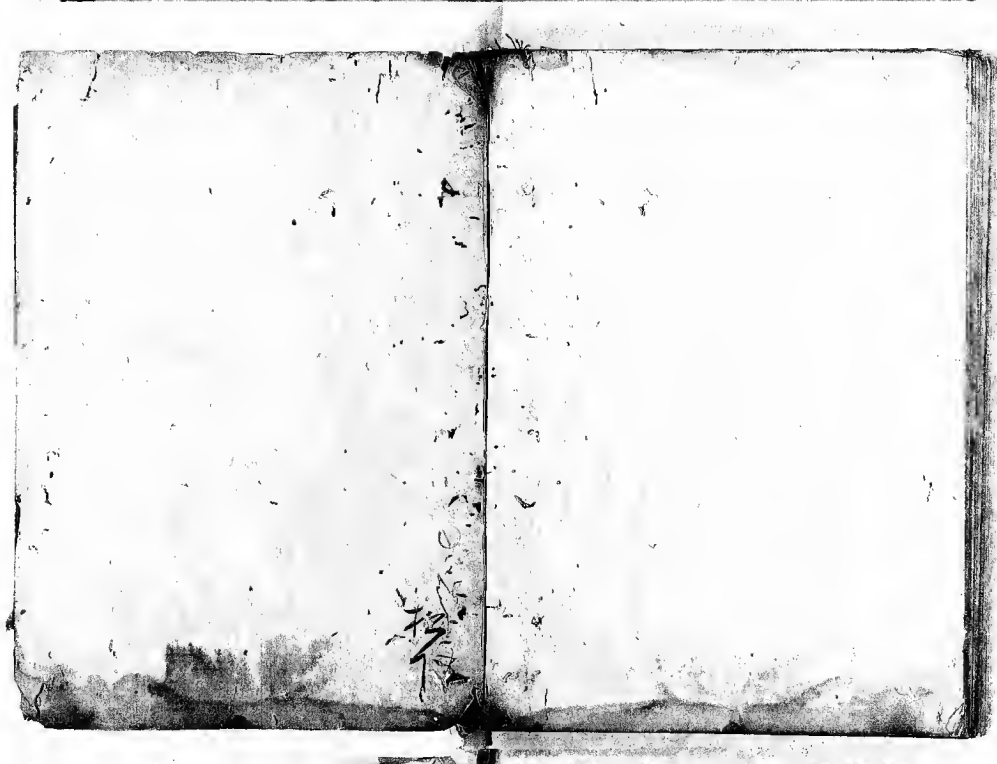
松奇とて

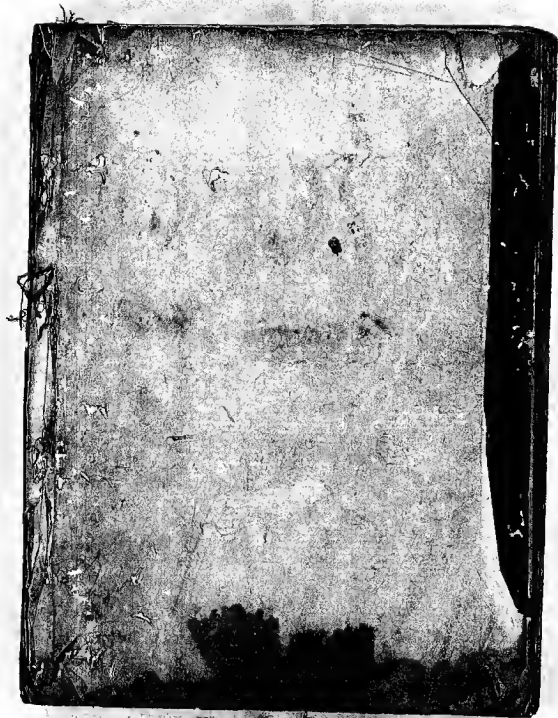
あはれはくせういふはくせういふはくせういふはくせう

松奇とて

太上天皇

あはれはくせういふはくせういふはくせういふはくせう





A 00

6326

新古今和歌集卷之十一

戀并一

題一

讀人あし次

ふたりのこころをよみてはしるすはなれど
なまぬのこころをよみてはしるすはなれど
人ね

ふたりのこころをよみてはしるすはなれど
なまぬのこころをよみてはしるすはなれど
女はなれど

昔のこころをよみてはしるすはなれど
なまぬのこころをよみてはしるすはなれど

中將更衣はなれど

延壽寺

しりしめあねふねふねとて（とありのそあり）
新らふ

えふあふあてあけ伊はとけい漢ふきとてあけりし
年定文の家言今

板上是則

世のやまをまけあけあけりといふてあけあけ
人のしとけうけあけりてあけりてあけりて

藤原高光

年とけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ
九條右大臣あけあけあけあけあけあけあけあけ

西宮前太皇

月あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ

大納言貞家

あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ
天曆沙阿言今

中納言朝忠

あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ

大宰大貳高遠

あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ
あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ

福徳云

唐衣神あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ

た大納言光武高遠家姫をとりあけりてあけりて

あけあけあけあけあけあけあけあけあけあけあけ

大納言言付

あつたをこのおかりよふ人のおかりおろそかといふ
はなれぬもろく女もこのおかりいふ
いふ

藤田云

わさき
柳川園日ゆきか
いゆきれい
平院侍従

我高きこもたふそゆきいふそもあふや
わさき

長義云

いふその煙をぬきいふそあふそわさき
題いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

あふそ煙をぬきいふそあふそわさき
いふ

大牛臣能宣朝臣

我が身は花の如く
春の風を待つて
花の散るを
見送る

大正(皇朝)朝臣

春の風を待つて
花の散るを
見送る

清和元帥

春の風を待つて
花の散るを
見送る

大正(皇朝)朝臣

春の風を待つて
花の散るを
見送る

躬愼

春の風を待つて
花の散るを
見送る

享和(皇朝)朝臣

春の風を待つて
花の散るを
見送る

藤波

春の風を待つて
花の散るを
見送る

大正(皇朝)朝臣

春の風を待つて
花の散るを
見送る

大正(皇朝)朝臣

おのゝとく神の言をいふもいふやわなふふふ
あふれりおのゝとく之をいふ事とふふ
え

太上天尊

おのゝとく年をいふやわなふふふ
百歳の中は也と

おのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく
おのゝとくおのゝとくおのゝとく
おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

入道おのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとく

おのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

おのゝとく

おのゝとく

おのゝとくおのゝとくおのゝとく

道信朝臣

おのゝとくおのゝとくおのゝとく
おのゝとくおのゝとくおのゝとく
おのゝとくおのゝとくおのゝとく

三多院女房入丸出

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

五月廿四日馬内侍のりき

前大納言云々

可も侍候しつゝあつてふ神をぬきぬら

馬内侍

又月多くあつてふ神をぬきぬら

兵衛依ふ侍る時六月より一尾あつてふ

せりくはつてふ

法成寺入道前大納言

郭をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

馬内侍

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

郭をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

郭をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

人丸

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

誤人不知

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

あつてふ神をぬきぬらあつてふ神をぬきぬら

可なり冬の本のくふを我神の人の神ありて
ありてをふくむる我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

女の子と云ふ人の子と云ふ人の子と云ふ人の子と云ふ

冬夜の海より我神の心をけりて見ゆる我神
神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ
我神の人の神なりと云ふ我神の人の神なりと云ふ

逢ふ人のつらさ
業平朝臣

久々お別れやいば無心として我々も手塚様

新古今和歌集卷第十二

卷二

五十首方々より集りて小寄書云

身太后更嫁成女

下りふふいほふん極ふん流ふん雲城ふんふん

考政大政大匠家百首考令。

藤原定家御作

此のふ海をくわ火焼くを焼くを焼くを焼く
 百を千をくわくわくわくわくわくわく

百二十多と云ふ

樞密大臣

高きのもは、千五百餘年と云ふは、其の神のそと、
 其の言はく、より二階、後、讃、

玄乃予之友乃二隆院讀

つづきへりて殿の事なり神に依るのりふりあり
年をとりて再いつるべしふりあり

後醍醐朝に

天子よりかゝる御の遣ひ奉りておとす年を

思忠のついで

前太政大臣

そつちやも無きついでに若水の思忠よりとれやと

た大將に侍りて家より百をす令侍り

一思忠のついで

後太政大臣

そつちやも無きついでに初め思忠よりとれやと

思忠のついでに思忠よりとれやと

後醍醐朝に

つづきへりて殿の事なり神に依るのりふりあり

後醍醐朝に

天子よりかゝる御の遣ひ奉りておとす年を

思忠のついで

後醍醐朝に

そつちやも無きついでに若水の思忠よりとれやと

一思忠のついで

後醍醐朝に

そつちやも無きついでに初め思忠よりとれやと

一思忠のついで

後醍醐朝に

そつちやも無きついでに若水の思忠よりとれやと

一思忠のついで

後醍醐朝に

そつちやも無きついでに初め思忠よりとれやと

一思忠のついで

後醍醐朝に

そつちやも無きついでに若水の思忠よりとれやと

一思忠のついで

後醍醐朝に

新經

成るべく思ふに、乃ち衆の雲々、此の故のふたれ
十五百萬云々
大衛門番通光

千五百萬分の一

大衛門番通光

わがわがのこころをなやませ

二條院讚岐

うらまへてくさき物ぶちのこをうへは海のとて

和奇亦乃奇今依愚增忘之作

善文擅文而繼

そのよき伴ひつゝいのちを頼むてゐるあゆみ

郭

信譽

人々を救ふ神

西泠印社

[illegible]

Handwritten signature or scribble.

水之類惡十之荷奇令夏惡代

楊政太政大臣

東坡先生集卷之四

入道前白布大長袖の袴を穿てゐる。

よもせもふよむのふ

大事大武重家

後乃世に歎く海に伊ふてそりやせきやまの神

右物言戚通又ハ、一ノルと云ふなりけ

女ものろくをね張るゝ

人之

いづれにふりふりふりふり後世に伝へる
前大納言信房中將の御名をいふに近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

いづれにふりふりふりふり近き場所
いづれにふりふりふりふり近き場所

思ひまゝに後とせしむる神を奉るなり
金蓮お國の太政大臣家言今

通國は

これお井の後のおのりいし作とていふなりや
百首奇中

お子内親王

着せしむる神とていふなりや
いふ神のあり

後油金奇力金

いふのりまゝなりや
十五百首奇中

格政太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのりまゝなりや
おのりまゝなりや

太政大臣

おのゝのこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
百首言の中みえのこゝろに

惟明親王

あすのひのけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
右衛門衛通具

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
水戸家系十五首言の中みえのこゝろに

皇太極天皇後成

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
冬意

定家朝臣

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
格政太政大臣家百首言の中みえのこゝろに

格政太政大臣家百首言の中みえのこゝろに

有家朝臣

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
藤原朝臣

藤原朝臣

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
久意とけしきもなき越前

久意とけしきもなき越前

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
夏月の子りけしきもなきの年あそびのこゝろに

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
家系百首言の中みえのこゝろに

格政太政大臣

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
定家朝臣

定家朝臣

おのゝこゝろにけしきもなきおのゝこゝろにけしきもなき
年とけしきもなきの初顔おのゝこゝろにけしきもなき

行思乃名之

皇太子文惠侯

予子哥生我子猷之

郭之

中鋼長方

多岐にわたる事象を、
（中略）

殷富門院大補

あはれ、め命をたかふたつ、わが身をたかふたつ

八隆院為念

此書は、赤い心づつ様のひびきをきかせる

西泠清話

何れもすふ所なき命ありてふやありてふや

[illegible]

新古今和歌集卷第十三

卷三

中國白話文運動

儀同三司母

口良の親を以て父と爲る命

悪人女をうそがうと云ふ丹で喰うてゑ

為りて物にほりて

禮遜公

かゝる大くもいふにつつ、萬花侯に、の極と云ふは

郭子
業平即臣

男ハ母方ニシテハ父方ニシテハ

人の心はかりそめなり

と朝の光に身をまかせたまはるるは、
初逢意の心を 後頼朝に

あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

かんく

うそをいふの、おののこしをいふて、

人共にも思ふ事と、あつたのまに、

ひふけのうら

相模

侍ふて、あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

實の方

あつたのまに、おののこしをいふて、

後頼朝

あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

九月

せうけうのうら

けう

大事師教通新

秋の夜の、おののこしをいふて、

影のうら

通信相伝

あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

更夜源因

あつたのまに、おののこしをいふて、

影のうら

系新院沙奇

あつたのまに、おののこしをいふて、

隠徳云

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

ひとりの奥の奥にうらなひのうたをいひてきこえり
夏の奥の奥のうたをいひてきこえり
おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

大納言清慎

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

和泉吉郎

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

赤澤清門

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

九條入道右大臣

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

藤原清成

おのけりていそまりの夜にきこえしうらなひのうたのち
清慎云

前載の竊書より引く。くみなりき

あり女 實方物に

おきて見袖のやういふも、も葉のちりも、

二條院清内院、うらむいふも、も葉のちりも、

二條院清内院

わきあき、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

新しう方 西の法師

面影も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

後物志のついで 後物志のついで

ふくむ、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

女の、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

しては、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

笑ひ成助

新しう、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

女の、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

ひひく、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

清く、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

三葉、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

花山院清内院

わき、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

法相寺、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

藤原通澄

伊予、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

新しう方 小竹屋

わき、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

藤原知家

東山より来る舟が、さうして、さうして、御此命の、

西行法師

と明かりいであら、横雲の、さうして、さうして、その、

ほろ元卿

おけの河井せきの水、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

張人、さうして、

父、さうして、さうして、さうして、さうして、

おけの法師、さうして、さうして、さうして、

定家朝臣

おけの法師、さうして、さうして、さうして、

哀乃、さうして、

太上天皇

さうして、さうして、さうして、さうして、

水、さうして、さうして、さうして、

杉政太政大臣

何、さうして、さうして、さうして、

さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、

おけの法師

さうして、さうして、さうして、さうして、

八條院、さうして、

何、さうして、さうして、さうして、

昭長明

そのうちとておちのしきき来びぬはねの
藤原秀能

侍人こすてし事とまじきいふ言ひやうに
待たしつゝ心ば おま内親と

老よりし移りし侍りぬ松のたなひいこふ松をみれば
哀乃言とてまじり お新法師

そのうちよきとて約しぬ此れゆゑとてまじり
定家お新

ふかしのねとや人のあひんまじりあつた月の
新しうか めん人しん決

春といひいふ来しとてまじりぬのちのちのち
人か

毎年の山ありとてしきき来びぬはねの
たす持朝元とてしきき来びぬはねの

まじりぬ松のたなひいこふ松をみれば
馬田ゆ

あふしとてやまじりぬ松のたなひいこふ松をみれば
天馬山時とてしきき来びぬはねの

おま内親と
女侍殿とてしきき来びぬはねの

おま内親と
坂上是則

おま内親と
三島院とてしきき来びぬはねの

おま内親と
おま内親と

いまだあまのうへにありの侍りなむとていふこと
女さうきくいふまゝにうへに侍りて候御
うへに侍りて候御

左清門後家通

いふことありていふことありていふことありて
そのしるしに侍りて女さうきくいふまゝに
うへに侍りて久我門大后許に侍りて

いふことありて

そのしるしに侍りていふことありていふことありて
久我門大后

いふことありていふことありていふことありて
久我門大后

いふことありていふことありていふことありて
殿前門院太輔

いふことありていふことありていふことありて
刑部卿補

いふことありていふことありていふことありて
西の法師

いふことありていふことありていふことありて
いふことありていふことありていふことありて

いふことありていふことありていふことありて
いふことありていふことありていふことありて

いふことありていふことありていふことありて
いふことありていふことありていふことありて

いふことありていふことありていふことありて
いふことありていふことありていふことありて

新古今和歌集卷第十四

戀可四

中將は侍る女にほろりあふ

清慎公

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

わ
いれんしる者

老ふやと思ひたりいゝ女をばあはれいゝつらふもい

中將源朝臣はろりけり

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

うゝ事ゆきては女をばあはれいゝつらふもい

て二百よりあはれせはろりけり

源朝臣

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

あはれ女
源朝臣

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

中將源朝臣はろりけり

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

右大將源朝臣

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

院陽の門院

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

院陽の門院

いゝ女をばあはれもあはれいゝ人かといひて社女のことか

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

善妙の少き人、善妙といふ人、女湯、藤原生み

人よけりきり 志武部

今にわやまけり月影をふりあやまりいふ

人よけりきり

月影をふりあやまりいふ

藤原経綱

月影をふりあやまりいふ

肥後

月影をふりあやまりいふ

後述太宰大佐

月影をふりあやまりいふ

西新法師

月影をふりあやまりいふ

月影をふりあやまりいふ

月影をふりあやまりいふ

月影をふりあやまりいふ

八條院高倉

月影をふりあやまりいふ

太上天皇

月影をふりあやまりいふ

杉政太政大臣

月影をふりあやまりいふ

持中朝言云經

月影をふりあやまりいふ

太清門塔通光

伊ふりなり月とあるを、
右衛門衛通具

いふ下、事、愛、方、
有家朝臣

月、
杉政太政大臣

おの、
家持朝臣

け、
は眼末末

その、
藤原秀経

人、
福

八月十五夜、
杉政太政大臣

月、
有家朝臣

い、
有家朝臣

松、
皇太極天皇後醍醐

か、
経高の家子、今、久、志、

詔をえてありけりともてふ。たゞし、宮の庭の
柊政太政大臣家百首言ふゆきなり

宗蓮法師

二人と昔の縁あり庭の木のうゑをむすむとて
九清山落通光

新しき

うゑを神とて奉りておとすも、人のまは

藤原保美卿

形見とて、わのりし命、汝なり。ハ首の庭の森

法橋弘遍

名残なり庭のあかりに、とてむすむ神とて、さうむ

柊政太政大臣家百首言ふ命なり

定家朝臣

けと移りけり。神とて、むすむ縁あり庭の木のうゑ

家信卿

風吹の嶺よりけり。さうむふあり。さうの形見とて、

百首言ふ時

柊政太政大臣

伊のり。さうむ。さうのさうむ。月日あるさうむ。さう

子又百首言ふ命

家信卿

思ひあり。さうのさうむ。昨日の雲の風の風

二條院清和天皇の言ふなり

刑部公範卿

日影の人のさうむ。さうのさうむ。さうのさうむ

新しき

殿富門院大輔

是れあり。さうむ。さうのさうむ。さうのさうむ。さう

あけ法師

うゝなる人々ありしに、これを知れりあり
いれり、我々の智いありと、衆に、いれり、我々の智いあり
建仁元年三月、今、逢、不、會、衆、の、心、也

吉河内大尼

あけ法師、いれり、逢、う、つ、か、る、もの、ひ、て、我、等、を、や
権、中、能、言、公、經

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
在、清、河、内、通、員、大

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、
衆、の、心、を、いれり、いれり、と、今、の、衆、の、心、を、いれり、

衆、の、心、を、いれり、

我意はつゞけまうしうに於て我吹せのそつとそり
影不知 式子内親王

伴もはつゝ心わくそと我吹せの吹りりり我乃うそせ
家子命 柊政太政大臣

いけきく物とや人の世と流るる夕暮れねるのこゝろ
前大僧正慈覺

いれり吹せもあつたじいしん人坊屋ののちの世
わすれりて今命はくも還不還意のつと
東蓮法師

まわさのひの青原のわたりとて美のつれれ世とあ
木玄流意十五首のうた
大上天皇

大上天皇

いれりわさの尾上の美のそあつたつとつとつとつと
有家朝臣

物あつていゝ大方のあつたふやうにわたりりりりりりり
相繼

草花しといふいふ方とてあつたつとつとつとつとつと
わすれりて今命はくも還不還意のつと

家子命

いれりわさの尾上の美のそあつたつとつとつとつとつと
藤原朝臣

あつていゝ大方のあつたふやうにわたりりりりりりり
影 長明

あつていゝ大方のあつたふやうにわたりりりりりりり
影 長明

千五百箇千金。有清山修通具

この衆のついでに林のありては月町と云ふ海

定家卿臣

清といふ人林の多き所なり。林の下の

林政太政大臣家言

宗蓮法師

いふを林のききや。林のききや。林のききや

志のききや。林のききや

宗大僧正意圖

我々の林のききや。林のききや。林のききや

林のききや。林のききや。林のききや

神のききや。林のききや。林のききや

宗大僧正意圖

ひききや。林のききや。林のききや

宗大僧正意圖

林のききや。林のききや。林のききや

宗大僧正意圖

林のききや。林のききや。林のききや

林政太政大臣家言

宗大僧正意圖

林のききや。林のききや。林のききや

林政太政大臣家言

林のききや。林のききや。林のききや

林のききや。林のききや。林のききや

曉衣乃夕

前大僧正安房

曉衣乃夕 夕衣乃夕 神乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

十五百歳云々

持中朝言云々

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

定家朝臣

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

水主願忘十五首云々

雅經

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

自太能交右史後成女

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

新古今和歌集卷第十五

忘十五

水主願忘十五首云々

藤原定家朝臣

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

友家友持朝臣

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

前大僧正慈因

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

左近中将三綱

夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕 夕衣乃夕

右衛門督通具

とくしを衣りあぢひをそへり。智人の病はひや
家も忘十首言。わんやをいふ

指中刺書後忠

衆のしやうもあぢひをそへり。智人の病はひや
衆のしやうもあぢひをそへり。智人の病はひや

衆のしやうもあぢひをそへり

藤原道信の長

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

友元元真

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

わんやをいふ。わんやをいふ。わんやをいふ。

高きうきく人神がくをね流の河の流津所をわ
みろのくあわくくくくくくくくくくくくくく
はくくくくく

源重之

おひやくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ゆくく

六條長良宮

かきくくくくくくくくくくくくくくくくく
歌くく

相模

父くくくくくくくくくくくくくくくくくく
福くくくくくくくくくくくくくくくくくく

徳徳云

長新くくくくくくくくくくくくくくくくくく

元春天皇御奇

流くくくくくくくくくくくくくくくくくく

板土是則

枕くくくくくくくくくくくくくくくくくく

いかんくくく

おひえくくくくくくくくくくくくくくくくく
侍くくくくくくくくくくくくくくくくくく
逢くくくくくくくくくくくくくくくくくく
浦くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
うくくくくくくくくくくくくくくくくくく
今くくくくくくくくくくくくくくくくくく

いふ方ふつがたし世の中ふものあるをいふてつたれ
にきてしとれぬ人いふあゝそのにきてし年のあつた
そと水は平に流いよもえやうにいふ中ふたれし
山ふのやうし世の中ふきていふいふにきてし世なり
あつたりいふあつたりいふいふにきてしあつたり
中ふもまのやうの流いあつたのけつたてふ成るあつたり
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
いふあつたりいふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたりいふあつたのやういふあつたのやういふ

人丸

あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ

ハバ女日

法系源

あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ

ふは女日

あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ

赤連衛門

急議の旨

あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ
あつたのやういふあつたのやういふあつたのやういふ

伊勢

春の夜の夢まわつたてをてふおのいゝえのいふまゝ

感明歌目

春の夜の夢まわつたてをてふおのいゝえのいふまゝ

女湯殿子女目

わづらふまゝうつれうらとけとけおのいゝえのいふまゝ

春の夜の夢まわつたてをてふおのいゝえのいふまゝ

能宣朝臣

くつりおのいゝえのいふまゝ

新しう

宗蓮法師

源川がとう木ぬるまゝおのいゝえのいふまゝ

百首千なり

家隆朝臣

逢ふてはまたおのいゝえのいふまゝ

新しう

基俊

ゆらゆらおのいゝえのいふまゝ

あまのうら

自太能久安俊成

あまのうらおのいゝえのいふまゝ

新しう

定家朝臣

あまのうらおのいゝえのいふまゝ

和歌のうら

自太能久安俊成

あまのうらおのいゝえのいふまゝ

新しう

式子内親王

けりおのいゝえのいふまゝ

ふふきやせし樂しきわく然うきものそをけりみ
崇徳院より百をうきそをきりきりし

のし

自太極文書後版

おひといひて面をうきそをきりきりし

影し

相撲

おれそしきふきそをきりきりし

男のうきそをきりきりし

一ゆるりし

馬門侍

はきりきりし

ひりきりし

ひりきりし

きりきりし

きりきりし

よりきりきりし

きりきりし

よりきりきりし

きりきりし

きりきりし

きりきりし

きりきりし

きりきりし

きりきりし

自太極院尾張

きりきりし

女のかゝるまじきをいひて

兵部少輔平親王

昔いかにいふまゝいひていつゝもいふまゝいふ

歌いふ

祈姬

雲のうしろに山雲のあまのりかゝのうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

延喜寺

今もあつたふかふかしたるものゝうしろのうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに

延喜寺

雲のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに

西宮

初原のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

舟のうしろに雲のうしろに雲の

後徳

舟のうしろに雲のうしろに雲の

権中絶を教忠

いふをゆをけりけり余りしをいふをけりけり

藤原元真

あうまう人けりけりあうまうまうまうまうまう

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまう

藤原惟成

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまう

藤原惟成

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

藤原惟成

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

あうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

正長へよまひの由信翁人よりきこえたる傳
て兼盛に承平八年又より成りぬるは月
日雖ゆるしぬ花をわけてし見ゆあり

源三忠親長

とて青よりぬ花のたかりて、たせり白ひかり
花の花と見ゆ

花山院淨寺

あまふはあついで花の花はひのぬふとて花
上東門院より花をよき花ひより花の紅花
をえゆ

大貳三位

花の花がふより人々の交りて、花を花よりふ
東三條院女侍より花ひより花の紅花より
花をよき花とて花をよき花の紅花より

けりあり

東三條入道花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より花の紅花より花の紅花より
花の紅花より花の紅花より花の紅花より

花の紅花より

花の紅花より

いぬ

大將相元

わがしめりやうん花橋ありし景此まはれいけ

高湯院より花のしらきとてらん中

肥後

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

二條関白内左

ねしれとてふし花のしらきとて花のしら

近侍司とてふし花のしらきとて花のしら

大田の花見とてふし花のしらきとて花のしら

藤原定家宛

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

寂勝寺のふし花のしらきとて花のしら

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

雅經

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

建久六年東大寺供養書に約筆の内具秘寺

の八重桜盛かりとて花のしらきとて花のしら

ゆき

いん

あやうふいあう高きやうふとて花のしら

こころわたりとて花のしらきとて花のしら

の花見よりいふははるるてある

源師光

伊予又月日の初と云ふは春の花のまゝと云ふを言
敷通乃く乃の許より前大納言云々の白川の家
まかりて又の日はこれより云々使ははるる
ゆふに

和泉郡

おろくふれあつてふれあつて我高の花の歌
不

題不知

藤原高亮

乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々
奈根前太政大臣家は白河院の筆と云ふ
て又の花乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々

河川方

奈根前乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々
後奈良院の時御前と飯前成橋花と云
ふのがのこしはるる乃く云々乃く云々乃く云々

大納言忠家

橋花乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々

大納言經信

乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々

玄風散花と云ふ

大納言忠教

橋花乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々
乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々乃く云々
三條院大納言給と云ふ鳥羽院御前

おやうとけのひかり花事六作のふかひりかき
世のつれづれ後百首のうたをいふ花の
うたをいふ

皇太極天皇後成

と我が世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
入道前守白太政大臣家守令

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
月家百首のうた

照月と雪のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ

前大僧正義家

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
題不知

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
西行法師

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
東山花のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
後頼朝

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
橘の仲のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ

またつれづれの世のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ
白浪のつれづれ花のつれづれ花のつれづれ

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月
題 法衣幸法

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

百箇年寺時 前大納言忠良

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

千五百箇年寺時 有寂朝臣

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

宗徳院より林下春雨と傳ふてはけり

はけりきり 八條前太政大臣

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

宗徳院より伝ふてはけり 傳ふてはけり

大の端より伝ふてはけり 大の端より伝ふてはけり

乃より伝ふてはけり 乃より伝ふてはけり

實より朝臣

圓融院寺時

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

おはるふ殿より使をきく此松のよりる春の来月

上東門院

り文よりいへりるを花の葉といふなり花の葉より花の
胃葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉
をば花の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉
をば

紫式部

秋代女ありやと云ふ花の葉の目より花の葉の目より花の葉
の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

西

三條院女侍人左近

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

小弁

花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より
花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より花の葉の目より

赤澤東門

月夜のていふにさう月影後のるはつらういふ

休懐冒言中に月夜と

曾太能まを史俊成

三月のふゆのわかれをさあわたりたりとてわかれ

題

花山院浄寺

そとより春のこゝろわかれ後のわかれのうた

増曾太能まをそとより春宮のうたのうた

義者久くそとより春宮のうたのうた

花山院浄寺のうたのうた

そとより春のうたのうた

月夜のうたのうた

そとより春のうたのうた

和泉武部

そとより春のうたのうた

題

七條院大納言

そとより春のうたのうた

そとより春のうたのうた

そとより春のうたのうた

中務

そとより春のうたのうた

そとより春のうたのうた

紀有常

そとより春のうたのうた

そとより春のうたのうた

いふわいふわのうと七月すのう月
きまひくうううう

はるおぬ

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

三條院御寄

月影のうううううううううううう
ううううううううううううううう

題

藤原の時

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

うううううううううううううううう

伴勢太補

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

題

森議正光

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

うううううううううううううううう

刑部正範

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

法華靜賢

うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう
うううううううううううううううう

八月十五夜和年あけおのこしき方
まくりし

氏部 範光

わすれぬい家のついでとふたは遠くは月をきり
和年あけおのこしき方

宣秋 門院丹後

夜にもしも満月あけおのこしき方
藤原盛方 丹後

山にもしも満月あけおのこしき方
永治元年 藤原氏

曾太 藤原氏

りてもしも満月あけおのこしき方
崇徳院 百首

いふて神の光の影をうとふ神の光の影をうとふ
文治のころは百首

たけなす 持云

いふて神の光の影をうとふ神の光の影をうとふ
百首

二條院 讃岐

いふて神の光の影をうとふ神の光の影をうとふ
月夜は懐き

藤原 通朝

いふて神の光の影をうとふ神の光の影をうとふ
月夜は懐き

藤原 長能

いふて神の光の影をうとふ神の光の影をうとふ
月夜は懐き

題

祈極

深路よりあはれけりふ見月のちみこいひつゝと
月ありきまきつたあひつゝいひつゝの
はたのほろこつやこころなれしやう

源通海

何れもあはれけりふ見月のちみこいひつゝと
夜涼しく移りしはたのほろこつやこころなれしやう

増基法師

わさの原けりふ見月のちみこいひつゝと
結宣朝にありし月圓まらち山ろくともみ
女許は夜あけてゆりあはれけりふ見月のちみこいひつゝと
何れもあはれけりふ見月のちみこいひつゝと

たのしみありけりふ見月のちみこいひつゝと
百首千首一時

杉政太政大臣

月見しつゝいひつゝのちみこいひつゝと
五十首千首一時

前大僧正

山ろく月ありけりふ見月のちみこいひつゝと
杉政太政大臣

わさの原けりふ見月のちみこいひつゝと
おし家乃千金

藤原景法

山ろく月ありけりふ見月のちみこいひつゝと
わさの原けりふ見月のちみこいひつゝと

和子取の哥會 深山曉月と集る

鴨長明

来ともくちりくちり深山の枝の葉よりくちりくちり
今宵もゆきゆきと秋の風もくちりくちり

藤原家範

あふの木葉のつらねにささく青の雲をたけ
月よまの雲首のほそをささく海をたけ
山家乃ては誘ひたる 飲園法師

詠といふものおもふの音ふ山のくちりくちり月を
題

花山院御哥

あふの月をくちりくちりくちりくちりくちりくちり

伴柳太輔

あふの月をくちりくちりくちりくちりくちりくちり

和泉武邦

とみあふの月をくちりくちりくちりくちりくちり
家々月照水とくちりくちりくちりくちり

大納言經信

あふの月をくちりくちりくちりくちりくちりくちり

秋のくれなゐもくちりくちりくちりくちりくちり
くちりくちりくちりくちりくちりくちりくちり
くちりくちりくちりくちりくちりくちりくちり

あふの月をくちりくちりくちりくちりくちりくちり

題

西行法師

あふの月をくちりくちりくちりくちりくちりくちり

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす
月乃ありて神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす
秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす
秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

入道親光

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

有英道經

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

大僧正慈圓

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

藤原信朝

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

源光

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

二條院

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

秋の月を神をなす秋の月を神をなす秋の月を神をなす

あひやれを思ふとふれを教おしりまの月
返

おま内親日

あひやれおあひやれと云ふは秋の山里
ま日社子金曜月乃こゝろと

橋政大政左

あひやれと云ふは秋の山里
お大持長經

あひやれと云ふは秋の山里
藤原保孝卿左

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

あひやれと云ふは秋の山里
あひやれと云ふは秋の山里

平兼盛卿左

月乃くゆはれ 前大納言佐房

公重しうをわつ者之の引 ゆりふ月の影ををる

題 月

神祇伯題件

望みわつをえれ月のけつふふ来丹さふ月のけつ

後惠法師

難ぬく垣すいあふふあふて月くふをふあふ

和方取の千金海邊月と伴ふて

前大僧正玄象

初年九月のあふの月をさふりてあふあふあふ

ふふふ神の月影のつてあふあふあふあふ

藤原秀能

ゆふふあふふの神影をさふりてあふあふあふ

望みわつをえれ月のけつふふ来丹さふ月のけつ

望みわつをえれ月のけつふふ来丹さふ月のけつ

具親

あふふあふてあふあふ月の影のあふあふ

ふにおひくあふりて後百首よりあふ

曾大僧正玄象

あふふあふてあふあふ月の影のあふあふ

十五首よりあふ

あふふあふてあふあふ月の影のあふあふ

題 不知

西行法師

あふふあふてあふあふ月の影のあふあふ

五十首よりあふあふあふあふあふあふあふ

花も木秋のまじりて散るるをみればとてとて秋の心

山里にともゆきたるしりしをみればとて秋の心

ゆき野長き許りきりて遠く太宰府に

夜もすむるふゆきをみればとてとて秋の心

近一 兼中絶言題長

世の中も秋とてゆきとて秋の心

遠く殿の心も人給ふるをみればとて秋の心

はかりしとて 冷泉院御幸

物もふりて秋の心

長月の一とて秋の心

源順

その心も秋の心

題一とて 秋の心

山川若く水もさきとて秋の心

百首奇事四 志満門内志

ゆきとて秋の心

南勝四天王院住持

藤原家信

花も木秋のまじりて散るるをみればとてとて秋の心

元補つとてとて秋の心

ゆきとて秋の心

ゆきとて秋の心

赤松門

花も木秋のまじりて散るるをみればとてとて秋の心

いかにやうくひを結て事なりけり
病の余情おきくふくむゆらもあはれなりけりや
事。いかにやうくひを結て事なりけり

中太能家文後成

松山や梢より君とわすれぬあをきかひに
佛名のありたるはけり花はれり

朱雀院清奇

時とくあはれけり花はれり
花山にありけりけり又の年川はれり
はあはれけり

前大納言公任

かゝるにありけりけり
満秋道旨

かゝるにありけりけり
題

中太能家文後成

花はれりけりけり
慈光寺師

おほくありけりけり

新古今和歌集卷第十七

雜言中

朱鳥五年九月紀伊國行幸時

河崎宮

白浪の深ねえのそよもを清世にふり年かたえ

題一

京都三宮合

山城のいづれかおのろそき見つやえり海にゆん

在東葉年朝に

わん陸のたけはあやうきとけはあやうきとけはあやうき
とけはあやうきとけはあやうきとけはあやうき

漢人云々

あつた海のきつとけはあやうきとけはあやうき

毎句之

難波のまかきとけはあやうきとけはあやうき

のの橋とけはあやうき

忠孝

年かたえのきつとけはあやうきとけはあやうき

惠慶法師

まの日のあつた海にゆんとけはあやうき

後述太宰大宰

くつ小あやうきとけはあやうきとけはあやうき

題一

権中納言定頼

かき津風あつた海にゆんとけはあやうき

まの日のあつた海にゆん

藤原教長

とて浦におきくわいせつふくはふとわくわく
大藤川時屏風寄 云々忠見

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
五十そきふていふをうらまふ

前大僧正教長

はた關次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

横政太政大臣

人をいふ不破の國を板のいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

北常陸のついでに 床蓮法師

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

海邊のついで 藤原教長

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

後冷泉院御寄

わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪
わいの関次いゆいゆいふをうらまふはの浦浪

小夜

大貳三三

佐吉の松いふとくおのりてきふもせし新をきけ

祝部成件

うらうら海のもくきふ吹上る浪は秋の風
而首すくもくうり時海はるる

越前

かきう風来さしおきやきし浦志海のもくきふ吹上る浪は秋の風
海はるるきふくうり時海はるる

夜降初に

見つけし浪のもくきふ吹上る浪は秋の風
大津まきふくうり時海はるる

わきまはるる

曾太能家更俊成

ふくきふ吹上る浪は秋の風
伊勢まきふくうり時海はるる

西の法師

鈴森のうきふ吹上る浪は秋の風
前大僧正哀成

世帯のうきふ吹上る浪は秋の風
あつきのうきふ吹上る浪は秋の風

西の法師

風はうきふ吹上る浪は秋の風
あつきのうきふ吹上る浪は秋の風

をきてくきふきふ 業平朝臣

河さぬにゆの林いそそちのゆつふ雪のゆらん
題 五原元音

暮林そよぶ春は山里いとく人けやかきりて
五十首并あり時 常大僧正慈海

暮みそくそ春をけりて雪のちとるけり
ぬいそふ 西行法師

うけふやそそくそ春をけりて雪のちとるけり
藤原家衡朝臣

いひてかきりて雪のちとるけり
ふまふま并あり 右清門傍通具

いひてかきりて雪のちとるけり
守覚法親王五十首并あり

雨風のちとるけり 有家朝臣
けりてかきりて雪のちとるけり

鳥羽りて雪のちとるけり
鳥羽りて雪のちとるけり 宜秋門院丹後

山里いとく人けやかきりて
百首并あり 家隆朝臣

けりてかきりて雪のちとるけり
題 東院法師

けりてかきりて雪のちとるけり
十将高亮横川はゆりて雪のちとるけり

けりてかきりて雪のちとるけり
ふまふま并あり 持大納言師氏

題

如光

白雲のりたがはく山いさきの雲をきりけり
結宣ねた大原野もさうてけりやふ山雲の
わや木もさしあそわのけりやふ人の
けりやふけりやふもさしあそわのけりやふ

世をさく木もさくけりやふもさしあそわのけりやふ

小記

結宣ねた

かたふそけりやふもさしあそわのけりやふ
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの

惠安法師

かたふそけりやふもさしあそわのけりやふ

題

西行法師

かたふそけりやふもさしあそわのけりやふ
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの

家蓮法師

信長奇命

太上天皇

かたふそけりやふもさしあそわのけりやふ
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの
けりやふもさしあそわのけりやふもさしあそわの

百首并中一冊

二條院讃

おのゝろくが代をいそよふ山にのりて中興年を諒

山家松よりて後 曾太師を更俊成

伊はく言ふふるを家の松よりてをえにわたり

善日千金の松風とソウ事代

有家の松

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

山寺はゆるりて 道念法師

世はく言ふふるを家の松よりてをえにわたり

お将井屋をえりてソウ事代

けふ 和泉武助

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

お将井屋

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

題 西行法師

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

殿富門院太輔

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

法橋寺小僧人ゆりて人のまうててをえ

としてソウ事代 道念法師

我がもつたものをとりてに神よりてをのきる

後白河院松屋をえりてソウ事代

見の供をえりて定家朝臣

諸君の山と世の事とを以てて又故よりなり月のみ
歎事ゆきなり 知是後遺前留太政大臣

山と川とありて 故より世とありて 故より世とありて
冬のこと大なる事にて 歎事ゆきなりなりなり
たをてりて 夢よりゆきなり

東三條入前攝政太政大臣

ふれぬとありて 故より世とありて 故より世とありて
川とありて 故より世とありて 故より世とありて
同職院卿

ひりりなりて 故より世とありて 故より世とありて
人なり

ふれぬとありて 故より世とありて 故より世とありて
布衣内侍ふりて 中納言公平

我世に 故より世とありて 故より世とありて
東三條太政大臣布衣内侍ふりて 故より世とありて

水上のうゑに 故より世とありて 故より世とありて
二條関白周太臣

氣勝と天子と 故より世とありて 故より世とありて
布衣内侍ふりて 故より世とありて
有家の臣

ふれぬとありて 故より世とありて 故より世とありて
天の行とありて 故より世とありて 故より世とありて
攝政太政大臣

ひりりなりて 故より世とありて 故より世とありて
題 實方期臣

天川とありて 故より世とありて 故より世とありて
堀河院卿時百首なりて 故より世とありて 故より世とありて

前中納言道房

松の根もさきとてしり成るる哉世一わくせれも橋

天鷹湯時屏風ふふくし前中納言道房

中務

いふおきいふおきいふおきいふおきいふおき

題 前大僧正意家

山よりいふおきいふおきいふおきいふおき

ありは師

やういふおきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

前大僧正意家

まのいふおきいふおきいふおきいふおき

おきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

おきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

家持物

いふおきいふおきいふおきいふおき

いふおきいふおきいふおきいふおき

式子内親王

いふおきいふおきいふおきいふおき

小侍迄

橋はしと海の家をわきより眺めし景深のそと
構改太政大臣

けし移る人ふとわかれゆくは事ゆかりなれど
五十首年也時 新經

彩やん露のこぼれぬそまやけのゆき里角
後惠法師方内よりて後と、ふけり
ありき木ふかきふたの許はけりかそと

賀茂重保

煙をててやどりのあき戻りし法の事を話せばさる

夫後法の園ある山寺まよひこりたりき
は露運あてゆりてゆきふりりの中

何あて事とてさるるに後とてい

てゆきなり 西月法師

やそらありしれひふりて何あてさるるなり
山家寺わきよりえりなり

前大僧正玄奘

山家とていふ人のこころはいかにいかにやうに
後白川院これと絵て後百首なり

式み月親王

そのえりなりしはさるるありきありきなり
出懷百首なりなりなりなり

皇太子元子俊成

いふ人なりしなりなりなりなりなりなり

花よりこゝろを替へる物々

祝部成件

のち、昔より、是より、多葉、之の、歌、又、社、

題

最大僧正堂圖

星野の里のあけと暮れの人をいふ歌を

西行師

有りては、わづかに、つねの友、今のも、昔の
 山、行、思、も、と、この、時、の、つ、ひ、を、そ、う、ま、の、新
 と、昔、跡、と、て、ひ、も、ひ、て、つ、ひ、と、思、ひ、う、人
 ひ、ん、の、お、も、年、う、て、風、の、ま、は、う、も、あ、ま、ま
 三井寺、焼、く、後、何、ゆ、れ、坊、と、あ、ひ、や、う、て

行方我意ハ此ノ物ヲおもしろく思はうと云

百首平讀乃不
檣政太政大臣

物言ひを此に記し、或る月日の如く、の面を

西) 法部

上卷之二十 胃と腸と之と肝と肺と心と腎と

人々を悩ましてゐるのじやないやう

黄之

西院過くこやうわいふよりこれこそあやう

予ふとみれば、さう女が、うーん、

是竹竿

能因法師

伊の巻より舟を立たせし意より高き日なり

ゆゑに高僧

惠愛法師

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
宇受は親に不首言、させぬなり、因に
のゝりて

定家物語

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
ゆゑにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

赤澤清門

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

題

人丸

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

天智天皇御事

新古今和歌集卷第十八

雜言下

山

菅贈太政大臣

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

日

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

月

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

雲

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

霧

いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し
いふにやいやりとを忘りて是より高の若し

雪

花より雪もいとてつわものさき言わく軍を看よん

松

花ぬきもつふよりそゆよりそ我らあまの雪はし

野

ほろりし山木をうけし雪もいとそなかりふをき

道

花やの園寺ふりもみはく人ゆつたわたり成り

海

海よりいそぐ水なりそよそよそよきつり月を照る

つり赤

雪ののちいとるりし雪はくち梅と我らゆん

後

雪れ本より雪なりて雪なりて雪なりて雪なり

題

讀人不知

雪ぬけのいそぐ水なりて雪なりて雪なりて雪なり

ふた百重雪なり 松政太政大臣

雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なり

雪

雪中能言道房

雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なり

増廣上人

雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なりて雪なり

人丸

わがどののくへはの水のよきせしめんは我がかり

能宣物氏

何鴨の腹をさしくほふ定なる成市をせん

お前さのねをいふ事とらんぬれ

順

もろろのくへはのねのふりてあつた陸をよやや

ぬ米をいふとらんぬれ

能國法師

是川の下より新やまのゆめを我がかり

あふふりぬとまろろふりてくはるを

は成寺入道茶坊政安

おとろくも花のねをいふとらんぬれ

まてはよそら縁ひかり時冷泉院の青い

のまのけいといとそとらんぬれ

はお家のとまやとそとらんぬれ

東三條院

その人のまのけいといとそとらんぬれ

冷泉院太曾太能文

はれとせのまのけいといとそとらんぬれ

上東門院お家のとらんぬれ

らんぬれのまのけいといとそとらんぬれ

ねいけいけいそとらんぬれ

枇杷曾太能文

かろくはのまのけいといとそとらんぬれ

通

上東門院

題

和泉武部

そふりす小いもの浦くあはれり我身の小いほ

屏風の繪くそふりすものうきかきてゆき

一條院

傳ふの海つ煙くふりやん人あはれそふりすの浦

が將高亮横川のやうてかりあう一ゆ

りうときそ絵くはうりあり

天曆沙奇

初り雪のふ雪そあやふの川水はる雪あかりん

川返

和泉

うー市の上は福をきそ雪は雪り山頂に

ふ雪さしそそ小峰くふそあはれあはれ

ふ業平ゆたの雪のいそそあはれあはれ

そふり雪さしそあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

雅高親

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

伊勢

白鶴をよそふと百歳のうけとておめかしめりて
あふふふとてゆていふゆき

藤本清心

あふふとてゆき升のゆきゆきふふのふとてゆきふふゆき
二條女院善徳樹院ありてゆきふふゆきふふゆき
いふとてゆきふふゆきふふゆきふふゆき
ふふふふのふふふふのふふふふふふ

いふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
寂勝曰天日院院ありてふふふふふふふふふふふふふふ
定寂院ありてふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

寂勝曰天日院院ありてふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ゆるりゆるりとして返りしるふかして

周防内侍

わがわがわがをさむる夢野河をたへみえの秋のゆき
新雪と作られぬ道は忠孝うかづきあ
りくそそそとつらげり思ふべきはあはれ

云里安見

この世の中とかくあはれなき人のあはれいつうが
野女の人を讀むる藤原の忠孝に
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれ
石に拳固りて石の上より石をそぎあはれなき
りあはれと秋のきりきりと

赤澤東門

あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
秋のきりきりと秋のきりきりと
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが

大納言經信

秋のきりきりと秋のきりきりと
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが

大將無時

あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが

大納言朝光

あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが
あはれなれどこの世の中はあはれなき人のあはれいつうが

ふいふ人かゝるゆり

ふいふに

ふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

小馬命ぬ

病のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

和泉武部

命のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

ふい

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

のふいふに思ふ病のふいふふいふふいふふいふ

大僧正

女主人内通

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

く、おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

まひめてうけまはさるゝゆゑふふりて

そとに

周防内侍

うつらふをいふてせは哀れをいふてわがのこころ

題

茶大僧正意

思ひをいふてわがのこころはなほあき

西行法師

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

守光法師親王十前よりいふてわがのこころはなほあき

茶大僧正意

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

述懐のこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

茶大僧正意

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

述懐のこころはなほあき

おはるも時自れをいふてわがのこころはなほあき

右邊の繪圖奥

神をくゝ病を治るゝとておとどけ月や天をえ

定家物語

君の代はありと何とまの後のゆくともておとどけ

家隆期に

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

わが世に備やあつた塩のいふいふ哀れをのちを来とて

そのいふとあつた月と秋をよとておとどけ

非經

君の代はありと何とまの後のゆくともておとどけ

皇太極天皇後成女

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

五五百曲千金 楊政太政大臣

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

題不知

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

五十首千金の物語

守定は親

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

權中の言

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

述懐のついで

大近中將公獨

おとどけの秋の福をのちを来とておとどけ

題 一 二

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

源師光

まのちびやうのまのちびやうのまのちびやうのまのちびやう

賀茂重保

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

尾木田長運

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

入道前岡自家百首并よきせぬはらう

刑部頼房

川舟のわらううつゝはらうのまはるうつゝはらうのまはる

題 一 二

大保都寛并

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

藤原行能

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

鴨長明

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

歌 一 二

源重景

うきものわらふやうせうのまはるうつゝはらうのまはる

西行法師

傳はく丹を以て禮をばうはせてある果の實なりけり
月の初日は月を送りてくやとけの故の月といふ人
五十を奇中に 前大僧正慈覺

ありふることゝ人々をうそめあやふくを月をばやう養
ふふていふも世に立の所をあらわせばいふて
死ねば師の里へも帰りおてひて出家一也
その月ふあうてゆふりりくせり
うき世より月と影のちとそらあやとくそとては
最僧が全真の四箇のふくふくといふ
けふ

兼仁親王

今も此の如く思ふは成る事や月日はたゞに流るる
おの僧の意氣少なりて不思ふが如し事なり
是の如く来りてしるして爲るや也

前右大将頼朝

[illegible]

集巻之六終るなり伊勢のうすひしきん
題しん 後慎云

蓮花の露をわづらふ親身は蓮のうへに消えしを
曾前院

不_レレ_レや_レん_レ中_レカ_レる_レ美_レ術_レを_レ作_レす_レて_レ我_レ方_レの_レ
 權_レ中_レ的_レ言_レ資_レ實_レ

市とてゝあまたつゞきつゝのちをふか
 ねの本は焼くつとたぐく

性直上人

子と父の相ふり世にありて三つ、なる我ハ
 題 くら次 後頼朝臣

題次

復報物

救ひてふ位乃ほのふはくしをゆゑにたきまかり

曾大雅文才優成

子之於我，如天之有日月。

春日社令 松風

家信初記

昔の頃のしるしをみれば、
昔の頃のしるしをみれば、

宣秋門院卅歲

此字之變海、月、實、計、人、祿、以、善、也

ワ、ハ、カ、キ、ク、ケ、コ

女流微子

又ふ、のち、未だて、やうせふ、山、ゆゑ、此、群、の、道、と、い、ふ、見

憶時糸舞人之まゝゆゑをとう

四停て續糸目迄一巻

實方朔

衣平乃山井水日影々 哉哉乃乃乃吾意

9
通儀節

いふおの衣ふりせむしはかきとやまじ

後冷泉院に代大尊會といふ所の寺にて

實孝の父のこともよく先帝に

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

力煥九清門

ゆき

和泉武部

くさりて亦と悲ひてふくみれりも由りてふくみれり
題不知

さくらねのいも地味もて泳ぎてふくみれり
越前守よりて大宰守へてふくみれり
ふいそくゆりてふくみれり

大僧正行基

妻とてくさりてふくみれり
世にふくみれり

百首

高田内大臣

さくらねのいも地味もて泳ぎてふくみれり
百首

百首

白太能家

しるふくみれり

百首

後頼朝

しるふくみれり

百首

僧正通昭

しるふくみれり

百首

しるふくみれり

百首

赤松衛門

しるふくみれり

和泉がやうにふくむとくはくはく
教道親とふくむてはくはくはく

うけりてふくむとくはくはくはく

和泉玄都

和泉はふくむとくはくはくはく

やうにふくむとくはくはくはく

中將時臣の事とて民を教先許し

はくはくはくはくはくはく

小澤系を治癒の術とてふくむとくはく

和泉玄都

世とてふくむとくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

和泉玄都

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはく

和泉玄都

東道人にしるして百首を一首せぬ
ふいふいゆる終り今またう通してあは
何事とわく海客といふるくたよのまゝ
くわわわいふふいふいふいふいふいふ
三信成といふいふいふいふいふいふいふ
そいふいふいふいふいふいふいふいふ

あけぼの

とあるせいのかたのいふいふいふいふいふ
千載集といふいふいふいふいふいふいふ
いふいふ

皇太極文書後成

いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

景徳院は百首をいふいふいふいふいふ

世の中をいふいふいふいふいふいふいふ

百首をいふ

武の内親王

いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

杉津園はありてけの道徳といふいふ

花山院抄

津の園のいふいふいふいふいふいふいふ

題いふ

中務卿具平親王

いふいふいふいふいふいふいふいふいふ

蟬丸

秋風といふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

新古今和歌集卷第十八

神祇年

そらあやふのふれ帳かもしあはてまをせむ
この年ハ日吉社自社取のうへなる南う
てよりゆきぬふれ着るをきりかへん
あけぬれに我あめは是れ梅のまねを
け年建之二年の春のうへ梅はまはれり
そは安樂寺梅とれてゆきうの春まで
くれしん

ゆきうの南の春をそくそいふそ人小の春を
け年ハ興福寺の南園春はくそくゆきう時
ま月の春のりのゆきう人縁下りうしん

やにしうきふれくそはゆきうのうへりあはて

日吉湯奇とみ

ゆきうの年ハゆきうそくそはゆきうのうへり
このうへり人ゆきうそくそく人ゆきうそく
ゆきうのうへりゆきうそくそくゆきうそく
そくそくゆきうそくそくゆきうそく

ゆきうそくそくゆきうそくそくゆきうそく
ゆきうゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう
ゆきうゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう

人まゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう

ゆきうゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう
ゆきうゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう
ゆきうゆきうゆきうゆきうゆきうゆきう

久望のありけり重きゆりきりくしり一をきりねしは
玉依姫 三統理平

いそりわし志舟うねるそ秋津波ふいふいわら
賀茂社の午日ういゆるや

やまかも海のかうへりうねるそ海もあひほり
神樂とらんゆききり

なくおききりね排装のやう人のうねるそ
憶時衆とより

まへのうねりきりうねるそつげねらん
乙女ゆききりそ赤糸使して大神をよめ

てらんゆききり 杉政太政大臣
神をよめきり川のうねるそ赤糸使して大神をよめ

おききりそ赤糸使してらんゆききり
藤原定家朝臣

おききりそ赤糸使してらんゆききり
云継卿勅使して太神をよめきり

りりきりおききりそ赤糸使してらんゆききり
らんゆききり

らんゆききりそ赤糸使してらんゆききり
春をまきり

神風やうねるそ赤糸使してらんゆききり
太神をよめきり 太上天皇

らんゆききりそ赤糸使してらんゆききり
おききりそ赤糸使してらんゆききり

題一

西行法師

まゝらそふ若根まゝにそふあふの影を
神清の月をふらふひそふあふの影を
伴努の月をふらふひそふあふの影を
ふらふ

ふらふひそふあふの影をふらふひそふあふの影を
神祇をふらふひそふあふの影を

大僧正

ふらふひそふあふの影をふらふひそふあふの影を
云継の助をふらふひそふあふの影を
てふらふひそふあふの影を
中院入道

入道前白家百有年

大僧正

神をふらふひそふあふの影を
後惠法師

立十首

越前

神をふらふひそふあふの影を
神祇納涼

大中

神をふらふひそふあふの影を
香椎まの松

入道

ちやうがわのまのあねの神のこころふくさる成り
八幡宮の権臣としてより其事とて一々それ
その夜よりて柳のしをいひききめり

ほろ成法

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
智恵よまて

周防内侍

年とていふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
文治六年乙未の春の月、
その夜よりて柳のしをいひききめり
月よりていふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

梅室使道

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
十箇年合の中に神祇とていふ

前大僧正意素

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
見あてよりて柳のしをいひききめり

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

いふ事よそのふくいあねの神のこころふくさる成り
神のこころふくさる成り

鴨長門

三月やその日の夜は月もあつたをわづかに
年々ゆるりと春暮日のうつらうつらして周防
因幡の川にあり 中納言清仲

あやとわづらふさふささ青い山のふねのわづら

又治六年女帝入内屏風は春日祭

入道前関白太政大臣

ふもつた祇乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

家々百首をうたふさう何神祇乃のや

あやとわづらふさふささ青い山のふねのわづら

曾太能文を後成

春日野乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

又治六年女帝入内屏風は春日祭

入道前関白太政大臣

ふもつた祇乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

家々百首をうたふさう何神祇乃のや

曾太能文を後成

春日野乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

又治六年女帝入内屏風は春日祭

入道前関白太政大臣

ふもつた祇乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

家々百首をうたふさう何神祇乃のや

曾太能文を後成

春日野乃のやおいく夜そふ邊のうまに外務

わがやまの山にわがてねをさかへけくの一のいづのふ
熊野入るて給いづる時入らば花のけりあり
まうと沸らぐて 白川院湯寺

嘆けし花のふとさうに神のつをさへさるる
熊野よりいりてまてまうりゆ

大上天皇

若くゆき若くふくはるはるのいづるまじし

新まはゆらうとてくもの川に

熊野行くはふねのまじしけりさるるふとふねのふ
白川院熊野はゆりてききり下りけり湯供
の人こそふねのまじさるるきりふねのまじさるる

熊野大寺大花

きりけり熊野の煙るけりけりけりけりけり

熊野入るてゆふふねのまじしけり
おとふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

けりけりけりけりけりけりけりけりけり
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

大上天皇

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

大上天皇

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

二 聯 及び内親はともういふてくさよ

今竹分又分
藤原道隆

多し山溪村は風雨の浪をよみしけり
 吾下の屏風の繪は五月神まつ家の人
 は馬りきく人の新衣を

能宣如后

少赤の赤らうといふものと云はれ神の體
に衣拂と云ふ神主のうと云ふ

3

君之

何事かを成し、世に名を傳へんと欲するもの

新古今和歌集卷第二十

釋教三

なれどはちちりゝゝ京の門と云我世の中いかに
ふふ思ふ何れと歎世中いかにわゝふの花の上のあ

二乃之方、清水音親、若以奇と云ふ、
 へり、知録上人、伯耆の大山と云ふ、
 志々、暖夜、月々、奇。

山より下ゆれ我よりゆれさらう月のそりえ
 船波のうきうきあはれのをくとぞきく

行琴書院

あゝもろく不承の浪に流さるゝうき世のうら
比叡山中夢定まのこに

1870

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛なり我に授けん

入唐時

智隆大師

ほのふりくいのとをぬくの神は我とてぬ

菩提等の講堂に枝よりのかいよりうろ

ろくわれとぬふりけり王のふりうろ

ふりけり王の志をぬふり

日藏上人

寂莫のけり志をぬふりうろ

終つ念ふの事とてぬふり

法園上人

南土阿耨陀の志をぬふり

題

僧都源心

我よりぬふりぬふりぬふり

天王寺の井の水とてぬふり

上東門院

ふりぬふりぬふりぬふり

法華經二十八品のうちぬふり

安品のうちぬふり

勸持品のうちぬふり

かたぬふりぬふりぬふり

四月よりぬふりぬふり

ぬふり

肥後

ゆき夜に寒く雨も多しうき世と物とのさびなり
史百弟子品

内秘菩薩行の巻
大僧正意圖

伊人の家より時々の月より月より月より

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

但宜翁如言大 宗蓮法師

うらけのききききききききききききききき

善薩清涼月 鑑於畢竟空

ききききききききききききききききききき

梅檀香風 収可泉心

ゆきせきききききききききききききききき

作是教已 後出地圖

やきききききききききききききききききき

此日已過命即衰滅

ききききききききききききききききききき

悲鳴啾咽 三痛惡本群

素肯見法師

ききききききききききききききききききき

弄懸入云為 宗蓮法師

ききききききききききききききききききき

合會有別難 源孝廣

ききききききききききききききききききき

衛教欲後生 宗蓮法師

ききききききききききききききききききき

懷忘慕 渴作狂佛

別うその面敷の意、亦、愛する人、山乃六月

十戒、不飲生戒

と、海の小、亦、不飲生戒

不倫盗戒

と、亦、不飲生戒

不飲生戒

と、亦、不飲生戒

不飲生戒

と、亦、不飲生戒

入道、亦、不飲生戒

如是、不飲生戒

二、不飲生戒

と、亦、不飲生戒

待賢門院中納言人、と、亦、不飲生戒

と、亦、不飲生戒

有量、と、亦、不飲生戒

と、亦、不飲生戒

義福門院、と、亦、不飲生戒

と、亦、不飲生戒

と、亦、不飲生戒

伊、と、亦、不飲生戒

横、と、亦、不飲生戒

百、と、亦、不飲生戒

有、と、亦、不飲生戒

有る一冊の老をみるやそのやきうふか
親心のやうと一丸留るに

西約法師

や晴るみりていとも月がしれぬまやうのやう

